

明日をひらく地域活性化のための情報誌

# 地域づくり

2011  
**12**

ISSN 1340-8917



特集 ■ コミュニティカフェとまちづくり

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



1 巻頭エッセー／広島を世界に誇れる「まち」に

松井一實（広島市長）

特集

# コミュニティカフェとまちづくり

- |    |                            |                           |
|----|----------------------------|---------------------------|
| 4  | 新しい「公共の場」を再建する試み           | 名和田是彦（法政大学法学部 教授）         |
| 8  | 北海道札幌市 小さな拠点から広がるつながり      | 土橋紘子                      |
| 10 | 埼玉県東松山市 期せずして被災者支援の拠点に     | 松本浩一                      |
| 12 | 千葉県船橋市 障がいのある人もない人も共に働くカフェ | 山本佳美                      |
| 14 | 東京都多摩市 高齢者が豊かに暮らせる「居場所」づくり | 寺田美恵子                     |
| 16 | 新潟県新潟市 いつでも人に会え話ができる「たまり場」 | 編集部                       |
| 18 | 静岡県富士市 商店街振興をめざす交流の場       | 角田有崇                      |
| 20 | 富山県富山市 生きづらさを持つ若者たちの支援カフェ  | 加藤愛理子                     |
| 22 | 滋賀県野洲市 女性が一步を踏み出す場として      | 小川泰江                      |
| 24 | 大阪府豊中市 認知症支援の「場」として役割果たす   | 夏川恵美                      |
| 26 | 愛媛県上島町 島民の島民による島民のためのカフェ   | 兼頭一司                      |
| 28 | 熊本県熊本市 人と人がつながるコミュニティカフェ   | 工藤明美                      |
| 30 | 情報交流とゆるやかなネットワークづくりを目指す    | 昆布山良則（公益社団法人長寿社会文化協会 事務局） |

レギュラーレポート

- |    |                                                                  |  |
|----|------------------------------------------------------------------|--|
| 34 | アンテナショップフェスティバル<br>23 道県の美味が一堂に集結！                               |  |
| 36 | 地域再生実践塾 平成二十三年度第三回 埼玉県草加市<br>ものづくりでまちづくり<br>伊藤清武（株式会社 都市産業研究所代表） |  |
| 38 | 合併市町村住民組織活性化支援事業（新潟県佐渡市）<br>地域資源活用を仲立ちとした都市との交流<br>菊地繁治          |  |
| 40 | 地域づくり団体探訪<br>民話の里・すみの<br>民話が紡ぐ地域住民の交流の輪<br>愛媛県新居浜市               |  |
| 42 | エンジョイネットワーク片品<br>地域の「宝」さがして輝く村づくり<br>群馬県片品村                      |  |
| 44 | スポーツ拠点づくり推進事業（京都府宇治市）<br>地域の活力を生かした大会づくり<br>小松洋二                 |  |
| 46 | 首長の思い<br>平成 24 年度は「原点回帰」<br>細江茂光（岐阜市長）                           |  |
| 48 | センター通信                                                           |  |

グラビア

- 2 コミュニティカフェとまちづくり  
47 手前みそですが… 【山口県下関市】



避難所を慰問するフラガールたち

（福島県いわき市）  
いわき市の観光施設「スパリゾートハワイアンズ」が、東日本大震災の影響による半年間の休館を経て、十月一日部分オープンし営業を再開。人気のフラガールの公演も復活した。いわき市は、三月十一日の震災で甚大な被害を受けたが、復興に向けて明るいニュースとなった。

四十六年前、炭鉱閉山の危機からリゾート再生に向けて行ったフラガールの全国ツアーを今回復活させ、休業期間中に全国キャラバンを実施した。被災地の慰問、日本国内、韓国と百二十五カ所で行った公演、自治体や旅行会社も訪ねた。

その二百日の軌跡を追ったドキュメント映画「がんばってフラガール〜フクシマに生きる。彼女たちのいま〜」も全国公開中である。

福島県への観光客はいまだに回復していないが、いわき市のフラガールの奮闘は、周辺観光地域に元気を与え、集客の弾みとなることが期待される。

（写真提供：スパリゾートハワイアンズ）

表紙  
フラガールで復興支援



広島市長 ● 松井一實

# 広島を世界に誇れる「まち」に

市政推進に当たって、私の使命は、何よりも広島を世界に誇れる「まち」にすることです。

具体的には、世界で最初に被爆し、廃きよから立ち直った広島は、世界のどこよりも、平和の心が育ち、街に平和が香る「国際平和のまち」でなければなりません。さらには、そこに暮らす人々のなりわいそのものが平和でなければなりません。すなわち、安定した仕事があり、働きがいがある、介護や医療に悩むことなく、また安心して子育てができる、家族でくつろぐことができる、元気にスポーツができる、優れた文化芸術を鑑賞できる、こういった市民生活ができるまちでなければなりません。その「国際平和のまち」が、世界の人々を引き寄せ、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けた取組を促すこととなります。そして、「国際平和のまち」を実現することこそが、「世界に誇れる『まち』」の実現にほかなりません。

こうしたまちを実現し、将来にわたって持続していくためには、都市の活力向上が不可欠であり、とりわけ、その活力の源となる地域経済の活性化が重要です。最先端技術から伝統工芸に至るまで、広島の高い技術力を生かした産業の振興をはじめ、雇用機会の拡大や企業誘致の促進、市民の生活を支えている多くの中小企業への支援などを通じて、ヒト・モノ・カネの好循環を生み出すことにより、地域経済の活性化を図ります。

また、地域の雇用促進とにぎわい創出の起爆剤として、観光振興に積極的に取り組みたいと考えています。ヒロシマの世界的な知名度や世界遺産をテコとしつつ、既存の観光資源を国内外へ積極的にPRするとともに、新たな観光資源の発掘・開発とその発信に知恵と創意を結集します。加えて、近隣市町や広島県との連携を強化し、

圏域全体の魅力向上と誘客の促進を図ります。こうした取組に当たっては、市民が広島に誇りと愛着を持ち、そうした市民と一体となった「広島ならではのおもてなし」により、訪れた人に「また来てみたい」「住んでみたい」と感じてもらえるような環境づくりを行うなど、まち全体としての「観光起こし」を推進します。

さらに、広島市が広島県全体の活力を生む存在となり、中四国地方の中核都市として存在感を高めるためには、都市機能の充実が必要です。とりわけ都心部においては、経済・文化の推進力を担う都心づくりをしていくことが重要です。このため、再開発等により生まれ変わっていくところある広島駅周辺地区と、従来から都心の中核を成してきた紙屋町・八丁堀地区を東西の核と位置付け、活力とにぎわいのエンジンを二つ持つ強靱な「楕円形の都心づくり」を進めます。また、旧広島市民球場跡地や二葉の里地区、広島大学本部跡地、広島西飛行場のヘリポート化に伴う跡地など市内中心部の大規模未利用地については、都市全体のバランスや将来性、それぞれの機能分担も視野に入れながら、都市機能の充実に向けて活用方策を検討し、その有効活用を図ります。

こうした取組を進めるに当たっては、心通う対話を通じて、市民の「想い」や「願い」を積極的に市政に反映すると同時に、一方で、厳しい本市の財政状況と真剣に向き合い、今何をやらなければならないか、今何ができるかをしっかりと見定めることが不可欠となっています。そのため、これまでに取り組んできた施策と今後展開しようとする施策のすべてを対象として、「選択と集中」の考え方の下、優先順位を付け、順位の高いものから確実に実現し、広島を「世界に誇れる『まち』」にしていきたいと考えています。

# コミュニティカフェとまちづくり



「まちカフェ」 店内での子ども料理教室 右上は看板  
● 埼玉県東松山市 (p10-11)



「みんなのお茶の間くるくる」 手づくりの小物をみんなで作る  
● 北海道札幌市 (p8-9)



福祉亭 将棋や囲碁を楽しむお年寄りたち  
● 東京都多摩市 (p14-15)



「ひなたぼっこ」 おひさまバンドとカフェメンバー  
右上は店の入り口  
● 千葉県船橋市 (p12-13)



「カフェ・プレアール」 店内で行われるヨシワラ大学音楽部のフルート演奏  
● 静岡県富士市 (p24-25)



「地域のお茶の間」 うちの実家 手づくりのカレーをみんなで味わう  
● 新潟県新潟市 (p16-17)



**Be-cafe 石窯ピザ体験もできる「森の Be-cafe」もオープン**

● 滋賀県野州市 (p20-21)



**Y's さくらカフェ 店内での自治会のミーティング**

● 富山県富山市 (p18-19)



**しまでカフェ 外観**

● 愛媛県上島町 (p26-27)



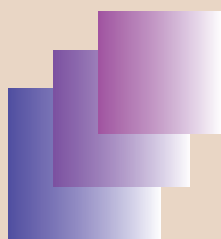
**「なごみわ喫茶室」 店内でくつろぐお客さんたち**

● 大阪府豊中市 (p22-23)



**カフェ型保健室しらかば お年寄りたちが庭のテーブルでランチタイム**

● 熊本県熊本市 (p28-29)



# 新しい「公共の場」を再建する試み

—「コミュニティカフェで地域の輪を広げる—

## 1. 居場所づくり、交流拠点づくりの広がり

サロンとか、居場所とか、交流拠点とかいった名称の場づくりがこのところ、全国的に広く取り組まれている。私自身、横浜市港南区港南台にある港南台タウンカフェ (<http://www.town-cafe.jp/kounandai/index.html>) とどうコミュニティカフェに関わって活動している。

一九八〇年代には、全国的にコミュニティ・センターの整備が進み、身近な地域の集会施設へのニーズはかなり充足されたように見える。また一九九〇年代以降は、市民公益活動の高まりに対応した「市民活動サポートセンター」といった名称の市民活動支援拠点が、各自治体で整備されてきている。

この上、まだ集会施設が必要なのであるのか？そう、まさに必要なのである。それは、これまで

に整備されてきた集会施設では満たされないニーズがあるからである。

そのニーズとは何であろうか？

それは追々語っていくこととして、まずここで注目している新しいタイプの集会施設とは、具体的にはどこが新しいのかを考えておこう。

それは、どんな人でも、特定の明確な目的を持っていなくても、ふらりと寄って居心地よく過ごせる点である。一九七〇年代以来のコミュニティ・センターは、多くの場合、生涯学習的ニーズを満たすために人々はあらかじめ予定して使用しているのであり、また一九九〇年代以降整備が進んでいる市民活動サポートセンターは、多くの場合、市民公益活動（特にそのための組織のミーディング）を行うために、人々はあらかじめ予定して使用するのである。

いずれもそれを使用するのは、自分の活動を持っている特定の人々なのである。もちろん公共



法政大学法学部教授 ● 名和田是彦

施設である以上、誰でもそれを利用する権利を平等に与えられているが、特定の部屋を特定の時間帯に利用するのは、その都度、利用権を設定された特定のグループの人たちである。

これに対して、交流拠点に寄る人は、不特定多数である。この種の新しい集会施設のうち、数の上で最も多いのは、地域福祉計画（二〇〇〇年の社会福祉法改正でできた仕組み）の下で住民によって企画されたサロンであろう。

これは町内会館などを使って月に一、二回開かれるというケースがほとんどであり、常設の交流拠点ではないから、来場する人はやはり特定の目的を持って寄ってくるのであるが、しかし、それは誰が来てもよいことになっている点で、ここで注目している新しい集会施設（ないしその萌芽）といつてよいだろう。

さらに、近年どんどん増加している交流拠点は常設であり、誰かが常駐して、いつでも誰でも、

特に目的がなくても、ふらりと寄ることができる。  
なぜ、いまどきの人々はこんなものを作ること  
に熱心なのだろうか？

そこで満たされるニーズとはどのようなもの  
だろうか？

## 2. 公共の場としての交流拠点

思い切ってこのような場をつくった市民活動団  
体は、「拠点を持てて本当に便利になった」「会議  
やミーティングの場所を探す必要もないし、仲間  
たちが何かとここに集まってきて顔を合わせる機  
会が増えた」「次々に場を利用するアイデアが湧  
いてきて活動の幅が広がった」と、喜ぶのが常で  
ある。

これは大きなメリットであり、それまでの集会  
施設では満たされることのなかったニーズだ。

だが、それだけなら、特に誰もが気軽に集まれ  
るような開放的なスペースを用意する必要はな  
い。仲間内だけの空間にすればよいはずである。  
それにもかかわらず、こうした交流拠点を作る  
人々は、自分らの仲間内だけに閉じられた空間で  
はなく、誰もが寄れる空間を作ろうとするのであ  
る。なぜであろうか？

新潟市にある「うちの実家」という交流拠点は、  
会員制なのだが、来場者のことを詮索しないとい  
う掟があるという。来場者は、この意味において  
不特定多数であり、誰もがその属性を問われるこ  
となく、ただ人としての資格において尊重され、  
居心地よく過ごすことができるのである。

ここに、はしなくも交流拠点の本質が表れてい

ると思う。それは「公共」というものに関する根  
源的な思想である。一定のルールとエチケットを  
守っていれば人として（人権の享有主体として）  
尊重される、という思想である。

こうした行動様式が不断に陶冶される「公共の  
場」を、日本列島に住む人たちは高度成長期から  
今日にかけて次第に失っていった。

例えば、公園は、どんな人でも安心して時を過  
ごせるまさに公共の場であるはずだが、「公園デ  
ビュー」という言葉に象徴されるように、今や特  
定の「仲間内」が閉鎖している居心地の悪い空間  
になってしまっている。

仲間以外は信用しないという風潮が様々な社会  
的場面で、従って地域コミュニティでも、蔓延し  
ていないであろうか。そして、そのことが担い手  
の固定化となって表れ、自らの首を絞めてしまっ  
ていないであろうか。

このことへの本能的な気づきが、これだけ多く  
の人々を交流拠点づくりに駆り立てているのでは  
ないだろうか。

## 3. 拠点の運営課題とコミュニティ カフェ・ソリユーション

(1) 交流拠点の一類型としてのコミュニティカ  
フェ

日本における公共空間の再建という、先進的で  
開拓的なミッションを担った交流拠点だが、しか  
し、行政側にはまだそれが公的に必要であると認  
知する用意がない。

横浜市港南区の港南台タウンカフェとさわやか

港南 (<http://www.konan-portal.com/3242/>) と  
は、港南区役所の区民活動センターのブランチと  
いう位置づけを得ているが、こうした開拓的な試  
みが通常の経常的行政サービスへと受容されてい  
く過渡的な状態なのかもしれない。

しかし、現在の財政状態では、行政が税金を使っ  
て安定的に提供するサービスになるのは難しいで  
あろう。そうすると、民間（「市民社会」）の側で、  
特に運営資金と人材について、安定的な解を工夫  
していかなくてはならない。

担い手の人材は、経営的センスと市民活動的セ  
ンスを兼ね備えた人が一定の人数いることが重要  
だと思う。コミュニティカフェに至る長い試行錯  
誤の市民活動の中で、そうした人材が、少しずつ  
の偶然が積み重なって集まってくるのである。



宮崎市生目台地域の「ふれあいるーむ」。子どもたちの利用も多い

運営資金についていうと、おそらくその源泉には三つのタイプがある。

第一は、補助金、委託料等の税金であり、第二は、会費、寄付、ボランティア労働等のいわば市民の浄財であり、第三は、コミュニティ・ビジネスとかソーシャル・ビジネスとかいわれる、通常のビジネスの形で公益的活動の資金を生み出すやり方である。

この三つは、現実には入り交じりながら使われており、どれか一つだけの資金タイプだけで成り立っている拠点は少ないであろう。本号のテーマである「コミュニティカフェ」というのは、この第三のタイプが比較的優位を占めているような交流拠点を指す、と整理できる。

第一のタイプに重点のある交流拠点としては、上記のように一般には今の状況ではなかなか難しいのであるが、宮崎市生目台地域の「ふれあいるーむ」などはその好例といえるだろう。

これは、宮崎市の各地域自治区（地方自治法第二〇二条の四以下）に配分されているコミュニティ活動交付金を使用して運営されているもので、交付金の使途の制限もあって、初期期の室内整備には、ボランティア労働もかなり投入されたから、第二のタイプも混じっているが、第三のコミュニティ・ビジネス的手法はほとんどない。

第二のタイプは、おそらく多くの交流拠点がこれに該当すると思われる。最初に空き店舗活用の補助金などを使って立ち上げ、そのあとは寄付金や会費、地域のボランティアなどを活用して存続を図りつつ、飲食や物品販売などの収益で運営費の足しにしていく、といった三つのタイプの混合

形態で、どれかといえば第二のタイプの資源が中心をなしているというケースである。

第三のコミュニティ・ビジネス的要素が主要な資源をなしているケースこそ、ここでの主要な考察対象であるコミュニティカフェである。

その多彩な事例については、まずは本誌の紹介事例をご覧ください。ここでは、私自身が関わっている港南台タウンカフェに即して、いくつかの論点を考えてみよう。

## （2）港南台タウンカフェに見る、コミュニティ・カフェの要諦

まず、運営資金は、最初は空き店舗の補助金をとっていたものの、開設三年目からは自力での運営になった。安定収益源となっているのは、壁いっぱいに設置されている「小箱ショップ」である。

近隣に住んでいるプロはだしのクラフト作家などが、自分の作品を世に問うために（まさに公共世界に問うために）ここに並べ



港南台タウンカフェ。木材を基調とした22坪の居心地の良い空間。壁一面に安定収益源の小箱ショップが設置されている



港南台タウンカフェのもっとも交流ステーション。常連もそうでない人も入り交じってお酒と会話を楽しんでいる

るといふニーズが結構あるのである。交流拠点の運営側にとっては、月々の賃料が安定して入ってくるほか、委託販売の手数料も収入となる。港南台タウンカフェの場合は、この収入が床の賃借料とカフェ運営の人件費との合計とほぼ均衡している。

多くの交流拠点が、補助金がなくなると同時に倒れてしまう中で、港南台タウンカフェが六年も続いているのは、この小箱ショップの経営が安定しているからである。

次に特徴として挙げられるのは、このカフェが誰でも気軽に入れて、その気になれば市民活動の世界に入ることが自然にできる、という雰囲気や大事にしていることである。

港南台タウンカフェは、ウェブ制作や地域情報をなりわいとしている株式会社イータウンと、横

浜港台商會と、それから市民活動団体「まちづくりフォーラム港南」（筆者はその代表を務めている）の三者による運営である。中心になりスクを背負っているのはイータウンであるが、まちづくりフォーラム港南も様々な市民活動的取組みをタウンカフェを舞台に行っている。

なかでも、毎月第一金曜日の公開飲み会「もつと×2交流ステーション」は、タウンカフェの「公共の場」たるゆえんを遺憾なく発揮しているユニークな取り組みの一つといえる。

ドイツの都市社会学者クレマー・バドニー教授が述べているように、「飲み屋はきわめて生き生きとした場だ。飲み屋は友人にとっても他人にとっても出会いの場である。飲み屋では、政治が議論され、延々と雑談が交わされ、飲み、笑い、遊び、食う」（Thomas Krämer-Badoni & Franz Dröge, *Die Kneipe*, S. 13）「飲み屋は、カフェやダンスホールや、さらには裁判所やマスコミなどと同様、基本的には公共の場である。つまり、飲み屋は法的には誰でも入場でき、誰も人種や宗教や性別によって入場を拒絶されることはない」（同、S. 281）というわけである。現に、もつと×2交流ステーションには、二十人を超える参加がある時も、反対に数人のちよつと寂しい時もあるが、なぜかいつも必ず、常連の地域の人以外に初めて訪れる人が一人はいる。まさに公共世界に開かれた交流の場となっている。

こうした場や、そもそも日常のカフェのオペレーションの場面でも、市民的センスを兼ね備えたスタッフの、お客さんとの何気ない会話の中から、様々な動きへの萌芽が不断に見い出され、時

としてそれが大きな動きへとつながっていく。

常設の拠点があればこそ、見ず知らずの人やまだ連携のなかった活動団体との接点から、地域の人材が見い出されていくのである。こうしたダイナミズムこそ、コミュニティカフェの「公共の場」としての最も大切な側面である。

そして留意すべきは、こうしたコミュニティカフェの注目すべき特徴が、決してカフェの直接の当事者だけの力だけではなく、地域とのつながりの中ではじめて発揮されていることである。

港南台タウンカフェも、横浜港南台商會の多大のお力添えをいただいているし、港南台連合自治会等の地域組織にも支えられている。地域の生き生きとした連携の中の一環を占めていることが、コミュニティカフェが機能する重要な一条件である。



港南台商會が管理している野外のフリーマーケットスペース「テント村」での港南台国際協賛まつり。横浜 NGO 連絡会の港南台在住の方とタウンカフェでつながり、協力して取組んでいる

#### 4. おわりに 「新しい公共」が機能するために

近年、「新しい公共」というものに、政策的な期待が寄せられている。一九九〇年代から「協働」のパートナーとなる民間（「市民社会」）側の諸主体を特徴づける言葉として使用されてきたが、特に近年、鳩山元首相がその施政方針演説等で用いて、さらに注目を浴びるようになった。

しかし、ここという「公共」とは、実は公共サービスの意味に限定されている。この点については、筆者は公共思想の観点からかねがね不満を持ってきた。

もちろん公共サービスは重要である。この不況と財政危機の困難な時代に、みんなの生活の基盤をなす公共サービスを様々な工夫でしっかりさせることが大事だからである。

だが、そのような意味の「公共」が機能するためには、既存の活動団体の人材や力だけでは不足している。地縁組織も市民活動団体も、担い手不足やその固定化、高齢化に悩んでいる。これまでのやり方に安住せずに、新しい仲間を求めていくことが必要とされている。

コミュニティカフェなどの交流拠点が「公共の場」として機能し、新しい担い手との出会いの場となることややはり必要なのである。「公共の場」という意味での「公共」こそ、「新しい公共」という政策理念を支える、より根源的な公共思想の核であり、コミュニティカフェは、そうした根源的な公共を再建する試みなのである。

# 小さな拠点から広がるつながり 一人に寄り添う・居場所がなくなる・地域が変わる―



みんなのお茶の間くるくる代表 ● 土橋 紘子

ある「まちづくりを考える会」の仲間とともに勉強会を続ける中で、新潟で始まった「地域の茶の間」を知った。七年ほど前のことだった。ふと気がつく、自分の身の回りでも少子高齢化が進み、一人暮らしの高齢者や子育て中の若い母親の中には、相談する人もなく孤立感や不安感を抱きながら暮らしている人がおられる。

このことは、決して他人事ではなく、「自分自身も住み慣れた地域で安心して暮らし続けるためには、今何ができるのか」との強い思いから、新潟の地域の茶の間を訪ねた。そこで大事にされていたことは「ゆるやかな関係づくり」だった。

## 「ゆるやかな関係づくりの場」づくり

参加した人誰もが感じる「居心地の良さ」は、参加している方々が誰からも、何も強制されることなく、みんな平等に穏やかに、気がねなく自由に過ごすことができるからだった。

そして、悩み事相談に応じる人、暮らしの中の

アイディアを話す人、楽器を演奏する人、小物作りを教える人等々、それぞれが自分の持ち味を生かして人の役に立ち、喜んでもらえる「生きがい」の場でもあった。

「みんなのお茶の間くるくる」は、この考え方の理念に学び、同じような方式を取り入れて、その年、平成十六年十二月に三人の仲間で開催した。

「顔の見えるご近所付き合ひ」ができる地域づくりを目指し、地域の内外に多くの居場所をつくりたい――との大きな目標に向けた、小さな拠点「ゆるやかな関係づくりの場」の始まりだった。

自宅開放型の狭いスペースなので、基本的にはご近所の方々との交流の場となっているが、これから居場所づくりに取り組もうという方々や福祉関係の事業所から実習生が見学に来られる。また、趣味の同好会やボランティアグループや町内会関係者等との打合せの場にもなり、「顔の見える関係が広がる場」となっている。

毎週火曜日、午前十時から午後三時までの都合のよい時に参加して、思い思いに過ごしている。

時には自宅でやりかけの手仕事に取り組みながらおしゃべりを楽しんでいるうちに、すてきな小物に出会うとみんなで作ったたくさん、近くの保育園や施設などに寄付をして、喜んでもらうことを楽しんでいる。ここが「生きがいづくりの場」にもなっている。



赤ちゃんのいるお母さんとは、娘や孫のように過ごす一時…

## 人に寄り添う

ほとんど毎回のように参加されるのはご近所の方だが、時には少し悩みを抱えた人が訪ねて来られることがある。勇気を出して思いきっての参加したのだろうと思うと、誰もがとても自然な温かさでお迎えする。ここでは「あれこれと事情を聞いたりしない」ということを約束にしているが、みんなとお茶を飲み、小物作りにも無理なくお誘いするうちに、自分から胸の内を明かし始める。そして元気を取り戻す。

ほんの一例を紹介すると――。

▽Aさんは、重い更年期障害で入院。退院後も家に閉じこもり、何もできずに悩んでいたが、あ



ご近所のハーモニカおじさんの伴奏で、懐かしい歌を歌うのも楽しみの一つ…



町内会の「ふれあい広場ほんごう」では囲碁や麻雀が大人気

- ・地域の茶の間「みずほ」…地域の会館
- ・地域の茶の間「茶茶」…自宅
- ・地域の茶の間「なでしこの会」…しばらく使われていなかった集会室
- ・地域の茶の間「きまま かふえ」…生活クラブ生協の事務所の一角
- ・まちづくりハウス

る情報誌で知った「みんなのお茶の間くるくる」に思い切って出かけてきた。

初めは声も聞き取れないほど弱々しい感じだったが、そのうち自ら体や心の辛さを話し始めると、その辛さを経験したことのある人たちが心から共感し、自分がそうであった時のことをしみじみと話してくれる。いうまでもなく二回、三回と会ううちに、見違えるほど元気な姿になる。ここは「受け止め、共感し合う場」である。

▽Bさんはこの夏、ご主人の希望が叶い、北海道への転勤が決まったので、生後十カ月のお子さんと福島県から避難して札幌に移住された。子育て中のお母さんたちとの出会いを求めて訪ねてこられた。

さっそく最寄りの子育てサロンや公開保育をしている保育園等をご紹介した。福祉や介護や子育ての関係機関や事業所とも交流があるので、ここは「情報提供の場」でもある。

▽Cさんは、障がいを持ったお子さんと暮らしているお母さん。子供さんが施設に通っている日中に出かけて来られる。元気に明るく振舞っているが、辛い話もたくさん出てくる。みんなはただ聞いてあげることしかできないが、それでも気持ち少しは楽になるのだと思う。

▽Dさんは、奥様の介護をしている八十歳の男性だが、時々買い物途中に立ち寄って、ゆつくりとお茶を飲み、少しお話をしてからでかける。

### 新しい「居場所」がつながる

「みんなのお茶の間くるくる」を見学に来られる方々は、以前からの友人が多いが、一緒に過ごして居心地のよさを体験した後は、それぞれの実情に合った形で地域の茶の間の立ち上げている。開設場所もいろいろで、広さも形も様々だが、基本的な考え方は同じである。

地域の茶の間…コミュニティスペースの一部分

地域の茶の間を始めた友人たちとは互いにつながりを持っているので、今後も地域の茶の間をたくさん増やすことや既存の地域の茶の間やサロンとも連携して、「顔の見える近所付き合い」ができ、優しさあふれる地域づくりを目指していく。

町内会主催の地域の茶の間「ふれあい広場ほんごう」は、「みんなのお茶の間くるくる」のノウハウを生かして、月に一度、地元の町内会館の広い部屋で行う。こうした動きの中から「ぬくもりのある絆社会」を目指し、地域変革が始まった。

### 地域を変える力生み出す

新しい時代に合った、新しいコミュニティづくりをしようと、住民参加型の「町内会改革プロジェクト」が立ち上がった。「顔の見える近所付き合い」「ゆるやかな関係づくり」を通して「ぬくもりのある絆社会」を築こうと、多くの住民が参加して、研修会や話し合いを重ねてきた。

四つの課題別プロジェクトチームに分かれて、これまでに出版された意見や要望を検討している。そして、暮らしを支えている個人や団体や関係機関とのネットワークの仕組みをつくらうとしている。プロジェクトでは「ふれあい広場ほんごう」の参加者たちが中心的な役割を果たしている。プロジェクトリーダーとして、また「みんなのお茶の間くるくる」の代表として感じるの、小さな拠点でも地域を変える力を生み出すことができる、ということである。

「まちカフェ」誕生から一年の歩み――



環境まちづくり活動から発展

コミュニティカフェ「まちカフェ」が誕生した

ちづくりに十数年取り組むメンバーが発起人となり、市の空き店舗対策事業の補助金を活用して、駅前のかん通り商店街にオープンした。

行政と市民、事業者が協働で環境まちづくりに取り組んでから約十年が経過し、活動の拠点の必要性を強く感じ、空き店舗を使ったコミュニティカフェという選択をした。

環境まちづくりは、ホテルの里づくりや里山保全、ごみ減量化や省エネルギーなど、多様なテーマのもと、市民活動として展開している。

同じような興味・関心を持つ方にはそれなりに活動が広がるが、市民の多数派となるまで活動を展開するには至らなかった。興味や関心がそれほどない方とどうやって出会い、活動を広げていくか、コミュニティカフェは有効な場になるのでは

元パーマ屋さんをリフォーム

元パーマ屋さんをお借りし、県産材で内装をリ

**オーガニック・カフェ**  
2年目を迎えたまちカフェのキャッチフレーズは、「自然と人、人と人との有機的なつながりをめざすカフェ」です。野菜だけでなく、皆様との関係も有機的(オーガニック)でありたいと思います。よろしくお願いします。

まちカフェ通信  
2011年10月号

コミュニティカフェとしてオープン  
まちカフェは、東日本大震災に  
る支援活動を行っています。被災  
地へランチ、被災地へ支援ショッ  
ぜひ食べて、買って、被災地の  
と被災者の支援をお願いします。

10月のまちカフェランチ

食べて、語って、応援 **被災者応援ランチ** あります

月曜日      火曜日

水曜日 木曜日

金曜日 祝祭日はお休

4

[illegible]

吉見町のブロンズワーカー「風の杜」  
山崎白根樹雄さん  
まちカフェで使い捨てたばかりのお話

私達のパンの作りは、衛生管理を愛情でこめて  
手洗いでスタートします。酵母、パンの原材料  
は食の安全、安心、美味加、身体や環境へ  
優しく配慮し素材時加は、

まじきおの適性、個性にむいて選んで  
ます。毎朝得意なメニュー、発酵プロセス、  
丸めこころ、縮らまこころ、置で熱か熟  
け、冷め後で、のこころ、のこころの  
縮らまこころ、

酵母は個性、こころ、こころと一生懸命  
働いて、縮らまこころの表紙の個性を生地を  
自然熱膨張は拡大したもので、毎日の食  
パンに個性を添えてお楽しみください！

被災地・被災  
まちカフェで  
てきている山川  
家族を失った  
生きがいの  
願ひにします  
被災地応援  
東松山産農  
内には宮城最  
め、岩手県  
オーガニック  
特別栽培の  
小川町産の  
有骨・無農  
しています。店  
だ。

者支援の取り組み  
 福島県福島市で原発事故で避難した、松本さん。宮城県山元町で津波で松本さんがスタッフとして活躍しています。半半として、食を補った応援、よろしくお  
 ラップ、はじめました！  
 スタッフの会の拠点として、まちカフェ松島の海苔製品や牛タンカレーをはじめ高田市の物産など販売しています。  
 好評 御販売！  
 松本さん100円に加  
 がわ町の若者がつ  
 海苔を卸売で販売  
 し、唐揚げでご購入

© 2004 Blackwell Publishing Ltd, *Journal of Internal Medicine* 255: 103–110

まちカフェだより(10月号) 発行 オーガニック・カフェ「まちカフェ」 〒355-0028 恵比寿山手新町3-4-6 電話080-2102-9901 [mc-cafe@ps.ksky.ne.jp](mailto:mc-cafe@ps.ksky.ne.jp)  
まちカフェは、新富町・ボランティア主体・まちづくりや人材育成、人と人をつなぐことをテーマとした、コミュニティ・カフェです。お仲間募集中です。

まちカフェだより10月号

ながら事業を進めた。

まちカフェの理念は、環境まちづくりの活動を  
受け継ぎ、持続可能な暮らしの提案（生ごみ減量  
化やせつけん運動、省エネ・自然エネルギーの活  
用など）、農産物の地産地消、街中の活性化、地  
域福祉の推進など複合的である。

調理好きの若者や主婦たちの雇用創出も兼ね、  
ワンデイシェフの形態をとり、チャレンジシヨッ  
プとしても位置づけた。

営業は月曜日から金曜日の午前十一時〜午後四  
時、それぞれのシェフが腕をふるい自慢の料理を  
出すはずだった。しかし、担当者の力量も異なり、  
お客さんからは普通のカフェ、レストランと思わ  
れ、当初はトラブルの続出だった。

シェフの力量を高めるため、同じメニューで販  
売し続けた一カ月もあった。地産地消、安全安心

にこだわるため、単価が高く、近隣の飲食店と比べて値段が高いことでも苦戦が続いた。試行錯誤の後、半年後くらいからは、シェフそれぞれの持ち味を生かし、こだわり食材のランチメニューが確立されはじめた。

まちカフェでは、理念を具現化するため、まちづくり塾や各種講座の開講、ギャラリ、コンサートの企画運営、こども調理教室なども行っている。ぼたん通り商店街との協働により、今年六月から街中を元気にするための「げんきマルシェ」(朝市)も始まった。

子ども調理教室経験者の子どもたちが「子どもシェフ」として出店したり、地元商工会の「逸品の会」の出店など、毎月第一土曜日、げんきマルシェは定例化した。

### 東日本大震災が活動の転機に

まちカフェが大きな転機を迎えたのは、開店から七ヵ月後に発生した三月十一日の東日本大震災だった。震災の対応について「まちカフェは何かやるのですか?」と、数名の市民からの問い合わせがあった。

私が被災地に入ったのは、四月三〜五日。岩手県、宮城県の被災地を訪れた。その後、四月十三日、まちカフェで被災地を訪れた数名の市民とともに報告会を開いた。四月十六日には「東松山震災ボランティアの会」が発足、名前の似ている宮城県東松山市への災害ボランティアバスツアーは四月二十二日から始まった。

災害ボランティアバスツアーは十月末現在、計



まちづくり塾

二十四回を数え、参加者も延べ五百人を超えた。また、福島第一原発事故に伴う避難生活者が二百人近く市内に來られるなか、榊葉町で被災した一人の女性がゴールデンウィーク中にまちカフェを訪れ、ボランティアを希望された。元々、まちカフェは有償・無償の違いはあれ、理念を共有するもののボランティアワークが基本である。被災者の方も趣旨を理解し、五月後半から厨房に立っていたのだ。

榊葉町の名物は、サッカー元日本代表監督のトルシエ氏が命名した「マミーすいとん」(おかあちゃんの味がしたというすいとん)。六月のメニューからマミーすいとんが始まり、福島県の方々がまちカフェに集い始めた。

現在では、榊葉町から二人、宮城県山元町で津波により家を失った被災者の方、合計三人のシェフが厨房に立ち、十月からは郡山市から自主避難された若い女性も補助スタッフとなった。

まちカフェは、期せずして被災者支援の拠点と

もなり、げんきマルシェも街中の活性化に加えて、「被災者応援」がテーマとなった。

こうした動きは、ぼたん通りを越えて、隣

の商店街や他地区にも広がり、被災地応援フェアとして物販や被災者がつくるランチ販売などが市内各地で始まることになった。

### 2年目からはオーガニックカフェに

発起人にとって、十数年間の環境まちづくりという市民活動の何倍も濃厚な人間関係、多様なつながりがこの一年間で生まれた。まちカフェは、二年目を迎えた今年九月から、「人と人、人と自然の有機的なつながり」をテーマとするオーガニックカフェとなった。

地産地消の活動は、地元有機農家の野菜直売としても展開し、食材の大半が有機農産物になった。それに加えて、訪れる方々とまちカフェスタッフ、および訪れる方々相互のつながりが「有機的」になり、真の意味でまちカフェはオーガニックカフェになりつつある。

埼玉県中西部の東松山市は、比企丘陵に囲まれ、緑が多い田園都市である。お近くにお越しの際は、ぜひまちカフェにお立ち寄りください。



ランチタイム

# 障害のある人もない人も共に働くカフェ ーノーマライゼーション社会の実現に向けてー



NPO法人ちばMDエコネット 事務局長

● 山本佳美

コミュニティカフェ〈ひなたぼっこ〉は、特定非営利活動法人ちばMDエコネットが運営する、障害のある人もない人も共に働くカフェである。ちばMDエコネットの「MD」は、知的障害を表す英語Mental DisabilitiesのMとD。「エコネット」で環境改善のネットワークを表す。

団体設立当初は、障害のある人もない人も共に地域の環境改善やまちづくり（グラウンドワーク活動）に取り組み、地域のネットワークを作っていた。「障害のある人たちが地域住民の一人として、皆と一緒に住みよい町をつくる」ことが目的である。

その活動は、遊休農地を緑あふれるコミュニティガーデンに変える取り組みや、知的障害のある若者が普通高校に通う姿を描いたドキュメンタリー映画『ひなたぼっこ』の制作と全国上映を経て、街中の拠点づくりへと発展した。

障害のある人となない人が共に働く場所を！

ちばMDエコネットの中心メンバーは知的障害のある若者たちである。彼らは小中高と地域の普通学級で障害のない子たちと共に学び、育ってきた。しかし、高校卒業後、働く道はなかなか見つからなかった。そんな時、JR船橋駅から徒歩十分ほどの商店街の一角に、一階がガラス張り、石造りの素敵な空き物件を見つけたのだった。そして、知的障害のあるエミコさんが「ウェイトレスになりたい」と話していたことをきっかけに、「その空き物件を借りて、自分たちでカフェを開こう！」と夢が膨らんでいった。

私たちの願いは、障害のある人もない人も地域で共に学び、働き、暮らしていくこと。残念ながら、障害のある人が働く場はまだまだ少ないのが現状である。そして、また、身内や親しい人の中に障害のある人がいないと、障害に対する関心は非常に低いのが通常だ。

カフェを開くことで、障害のある人が街中で働き、その姿を多くの人が見るようになる。また、お客様としてお店に入り、彼らと会話をする人が

増えていく。そのような一つ一つの積み重ねが、障害のある人が暮らしやすいまちづくりにつながるのではないだろうか。

…そんな想いで、二〇〇二年九月にコミュニティカフェ〈ひなたぼっこ〉をオープンした。

## 〈ひなたぼっこ〉の仲間と店の様子

現在のカフェは、店長一人と障害のあるスタッフ六人、ボランティアさん約十五人程度でシフトを組み、運営している。営業時間は午前十一時～午後六時までで、水曜日と日曜日が定休日。オリジナルの炭火焙煎コーヒーは、一杯ずつ手を入れていて、オープン当初からの看板商品。また、ちばMDエコネットのメンバーが運営する「佐倉ミックスベリーファーム」で栽培した無農薬のベリーを、ジュースやスイーツに活用している。

### ランチ

メニューは、常時百種類以上をそろえた、全国＆世界各地のレトルトカレーが目玉商品で、それ以外に手づくりの



ひなたぼっこの店内



ひなたぼっこスタッフ



英会話教室の様子

食事も用意している。

店内にはボックスショップがあり、個人の方や、福祉施設のオリジナル商品を販売している。また、壁の一部をギャラリーにして、作品の展示をした方へ貸し出している。

その他、カフェでは定期的に教室（英会話教室、押し花教室、アロマ教室、ニットカフェなど）を開いている。イベントではカフェ全体を使った企画展やライブ、時にはフラメンコショーなども行っている。

### カフェを拠点にした人のつながり

さまざまな立場の人が関わり、多くのボランティアさんに支えられていることが〈ひなたぼっこ〉の特徴の一つ。先述したように、飲食以外のイベントや教室をするようになったのは、ボランティアさんやお客様とのつながりから、「こんな

ことをカフェでやってみたい」という声をたくさんいただくようになったからだ。

例えば、英会話教室の講師のイアン先生は、ボランティアさんのご紹介でカフェに来たことがきっかけで、二〇〇九年から毎週一回、一時間五百円のレッスンをしてくださり、その講師料を寄付して下さっている。

イアン先生は「スコットランドでは自閉症の子に英語を教えていた。日本でも障害のある人に英語を教えるような機会を求めていたけれど、十年目にしてやっとここが見つかった」とおっしゃっていた。現在、英会話教室では障害のある人もない人も一緒にレッスンを受け、近隣にお住まいの方の参加も多い。

その他の教室にも、近隣の方が参加され、徐々に地域の人の顔が見えるようになってきた。このように、自分の特技を活かしてカフェに関わって下さる方が増え、人の輪が確実に広がってきている。

### 地域との結びつきから、次のステップへ

〈ひなたぼっこ〉は、障害のある人となない人が共に働き、たくさんの方が出会い、人のつながりが出来る場所になってきた。そして、この九年間で、地域の商店街や地域住民の方々との結びつきがしっかりとできてきた。

商店街を歩いていると、スタッフに挨拶を下さる方も多い。また、船橋市本町通り商店街がNPOと協働で毎年二回開催するイベント「きらきら夢ひろば」には毎回参加し、他団体との交流も盛んになった。このイベントでは〈ひなたぼっこ〉の障害のあるスタッフが仲間と組んでいる「おひさまバンド」も出演し、たくさんの方に演奏を聴いていただいている。

このように、カフェから外へ出て活動する機会も増え、一昨年には、「ユニバーサル就労」の取り組みの中で、高齢者施設「高根台つどいの家」で障害のある人となない人がチームになり、清掃の委託業務を始めた。障害のある人が〈ひなたぼっこ〉を一つの拠点として、さらに別の場所へ巣立って行くということはとても大事なことである。

自分の好きなことに挑戦したり、新たな環境で仕事に取り組んだり。常に戻れる場所〈ひなたぼっこ〉がある、という安心感のもとで、次へのステップを創り出していきたい。

# 高齢者が豊かに暮らせる「居場所」づくり

## —10周年を前にして福祉亭の取り組み—

NPO法人福祉亭 理事 ● 寺田美恵子

### 福祉亭のそもそも

二〇〇一年一月十三日、第一回高齢者社会参加拡大懇談会が、当時の多摩市高齢福祉課の呼びかけで開催された。多摩市は「世界最速で高齢化が進むまち」として、高齢者が住み慣れた地域で、豊かに暮らし続ける方策を模索していた。

懇談会は、参集した市民で熱く盛り上がり、かなり早いスピードで二つの施策を構想していった。懇談会は、後に事業協議会となった。

文化部会は、社会参加の機会拡大として「高齢者いきいき祭り」グラン多摩フェスタを企画した。高齢者の日頃の活動を踏まえ、その活力を地域のみなさんと共に分かち合うお祭りとし、福祉部会が現在の「福祉亭」の骨格となる「居場所づくり」を構想した。

東京都の「いきいき事業」として、この年の七月の補正予算にも組み込まれ、九月議会で承認された。それから、十年が経過した。

「いきいき祭り」は、東京都の補助金の終了とともに市の委託事業に移行し、現在も九月の多摩市の長寿を祝う会と並行して、市民の手で企画運営をする「長寿を共に祝う会」を開催し、年間を通じた出前事業も行っている。

福祉部会は当初のNPO法人受託事業から、市民がボランティアで担う運営となり、その後、賃貸契約先のUR都市機構の求めにに応じ、NPO法人化していった。現在は都のミニデイ事業の補助金と、日々の運営の売り上げから、運営費を捻出している。

### 「広がれ広がれ笑顔の輪」

福祉亭が構想された当時、「市民協働」が「新しい公共」という概念とともに、地域で市民活動を活発に行う市民たちの手で模索されていた。そして、介護関係者たちは、「寝たきりゼロ」をめざすという言葉で問題視された「社会的入院」と、「介護の社会化」をめざす介護保険制度の導入も前年にあり、「介護予防」は急務だった。

そんな時代背景の中、高齢者の生きがいづくりと「場の提供」ともに、二〇一〇年問題とまで言われた団塊世代の定年退職後の地域活動の場づくりと、その居場所としても構想された。

「広がれ広がれ笑顔の輪」が福祉亭発行の「いきいき新聞」には当初からある。それは「ホスピタリティ」とも表現される、福祉亭の中核を形成する考えとなっていた。「鉄の扉で閉ざされたまち」としてあるニュータウン。「オールタウン」とまで、マスコミに揶揄された。そんな中で、「手をつなぎ始めた団地住民」は、NHKの最初の取材のタイトルだった。

市民が思い描くまちの姿を、現実のまちに落とし込む。その手始めは、地域のみなさんにとって居心地のよい「居場所づくり」だった。当初、団地特有の現象と考えていたことが、実は、全国いたるところにあり、地域を疲弊させ「絆」という言葉が流行し、「コミュニティ」のありようが取りざたされた。



ボランティアの皆さん

## 活動を通じたこれまでの成果

地域の主婦層やリタイアした男性を巻き込んだ素人集団が、毎日毎日「定食を出す」という行為。「コーヒーをいれる」という行為。それらが一体、何を意味しているのか、考えるゆとりもないまま、運営のための諸々の作業に追われた。

福祉亭の活動は、多摩ニュータウンの諏訪永山という第一次入居地区の小さな試みにしか過ぎない。その試みが幾ばくか注目され、外に向かつて活動を発信するような時、外から福祉亭に向けられる言葉に驚き、改めて運営の意味を知る、という経験をしてきた。

忘れられない言葉がある。「定食を出すって、いいですね。『お腹が空いた』って、『さびしい』より、言いやすいですよね」という一言だ。

「ひとりで、寂しい」とは、何十年と社会で、

立派に生きてきた人間にとって、なかなか言いかねる、言いたくない自分の中の弱さだけに、それをさらけ出すには、勇気がいる。

私たちにとつての定食は、単に「ご高齢者の一日のリズムを刻むもの」だったり、「高齢者を健康にお過ごしいただくためのエネルギーの素」でしかなかった。またある時、「定食は福祉亭の『いのち』そのもの」とおしかりを受けた。「定食屋ではない福祉亭であつてはいけない」という気持があつた。

地域の本当の姿がまだ、見えていなかった。定食は福祉亭の生命線であると同時に、地域のご高齢者の日々の生命を支えるものになっていたことに気づかされた。

これらの言葉で、福祉亭の活動の意味をさらに、深く知ることになった。常盤平団地（千葉県松戸市）から発信された「孤独死」問題は衝撃だった。「社会的入院」をなんとかしなくては…と、立ち

昼食時のひと時



子どもたちが職場体験



向かっていったつもりなのに、もっと大きな「孤立する死」というものに否応なく向き合うことになった。

素人集団の福祉亭にできることは、十年経っても限られる。ごく普通の「市民の手でできること」の模索の連続で、結局、

「あいさつ」「声かけ」を惜しむことなくやるというところにたどり着いた。「ひと声」。ただの「挨拶」が持つ力。その力に驚きながら…。

## 現状での課題と計画

十年の経過は結局、運営する側にも地域にとつても、十歳の年齢の加算となった。今年、多摩市は市制開始四十年を迎えた。「まちの高齢化」は福祉亭の高齢化と同時並行で進む。

福祉亭の第一世代に属するみなさんが、それぞれ静かに福祉亭を去っていくこともある。「福祉亭の宿命」と慰められもする。様々な姿の「その時」と、その時までの諸々のテーマ。福祉亭として、どう支え、何を手助けできるのか。緊急時にどう対応するか。地域のネットワークをどう作っていくのか。取り組むべきことが山積している。

経済の動向に左右される利用数の変動にも苦慮している。運営の担い手のボランティア集団のモチベーションは、多くご利用いただけることで維持できる。以前は、定食ご利用のみなさん、午後のお茶、夕方のお酒と、利用には三つの山があつた。

今年三月十一日の東日本大震災以降、どこか元気がない。ご高齢者が元気でないということは、地域の元気、世の中の元気がないということにもつながる。それは地域をさらに疲弊させる。

来年に控えた福祉亭開設十周年に向けて、少しずつ動き出している。記念誌の発行とイベント。「地域包括ケア」「支えあうまち」を目指して、楽しい一年をつくっていききたいと考えている。

# いつでも人に会え話ができる「たまり場」 —地域やご近所に助けられ広がる支え合いの輪—

常設型「地域の茶の間」うちの実家

●編集部

新潟市東区の住宅街の一角に、小さな子どもたちからお年寄りまでが自由に立ち寄り、お茶を飲みながらおしゃべりし、気ままに過ごせる場所がある。新潟市在住の河田圭子さんが代表を務める、常設型「地域の茶の間」うちの実家だ。

秋晴れの十月下旬。空き家となった民家を利用した「うちの実家」を訪ねた。開け放しの玄関から中に入ると、「いらっしやい！」と迎えてくれ、初めての人でも途端にそこに居る人たちと溶け込めるような雰囲気である。

## 子どもから高齢者まで気軽に集う

ふすまを取り払った八畳と六畳の二部屋と廊下のスペースには、介護が必要なお年寄りや車いすの人、目の不自由な人、それに小学生の子どもたちが、手作りのカレーライスを食べながら歓談していた。ランチタイムの食事は、具だくさんの汁物を中心にたくさんのお食料を使っている。

このお茶の間では、それぞれが思い思いの時間

を自由に過ごす。河田さんや事務局長の野崎トシ子さんをはじめうちの実家のスタッフが、訪れた人たちと話したり、手助けが要る高齢者の介添えをしたりしていた。この自然なおもてなしが「居心地のよい場」を醸し出している。

土日と水曜を除く平日の四日間、午前十時から午後三時までオープン。この時間帯なら、だれがいつ来ても、いつ帰ってもいい。決まったプログラムのようなものはない。人と人とのつながりの場づくりを通じて、住みなれた地域・自宅で暮らし続けるための仕組み作りに取り組んでいる。

一回の参加費は三百円。うち二百五十円は家賃協力費に充当し、あとの五十円はお茶代という。空き家を借り受けているため、格安ながら家賃がかかる。県・市などからの補助金や助成金はもらっていない。地域や学校、他機関・団体との連携を大切にしながら運営しているという。

「皆さんが飲むコーヒーは障がい者団体で作られているものです。トイレットペーパーも同様で、居ながらにしてできる社会貢献です。会員たちが



玄関前に小学生の子どもたちが集合（右端が河田さん）

手づくりで作った小物類や衣類の作品は、バザーを開いた時に販売され、この売り上げの一部も運営費になります」と河田さん。

「三百円の参加費が運営資金。参加していただくことが『うちの実家』への協力にもなるのです」という。ちなみに、今年三月十一日の東日本大震災以降、これまでに三回バザーを開いたが、その売上金の三分の二は被災地への義援金として寄付された。

## 自然発生的に始まった「居場所」

「地域の茶の間」は河田さんが始めた有償の助



お年寄りも気楽におしゃべり



大勢の人がお茶の間でくつろぐ

「老年看護学実習」などの研修中だった。研修者の一人は「学校での座学とは違い、実地での研修はとても勉強になります」（新潟県立大学生）と語りながら、お年寄りたちに寄り添っていた。

この日は、地元の小学四年生の子どもたち数人もいて、お年寄りとおセロゲームなどを楽しんでいた。

「自分の実家に帰ったように、好きなように時間を過ごし、何もしなくてもいい自由さがあるからではないでしょうか」と語る。河田さんらの取り組みは今や、様々なメディアでも紹介されているためか、「地域の茶の間」はすでに新潟県内に二

千力以上あるという。

そして新潟市もいま、各地区に「地域の茶の間」づくりを積極的に進めている。

け合い活動の事務所が、平成三年（一九九一年）から自然発生的に、子どもからお年寄りまでの居場所となったことから始まった。そこでは、話し相手を欲しがっていた高齢者が見違えるように元氣になっていく様子や、そこで知り合った人たちがいつの間にか、自然に相手の不自由な部分に手を貸し合っている光景が見られたという。

ある時「このまま帰らないで泊まりたい」とつぶやいたお年寄りの声がかきつけとなり、現在の空き家を借り、常設型地域の茶の間「うちの実家」がスタートした。平成十五年のことだ。

### 地元大学生らも看護の実習研修

河田さんがこうした活動に力を入れ始めたきっかけは、平成元年までさかのぼる。認知症の親の介護にあたるため、勤めていた大阪府社会福祉事業団を退職し、家族と離れ単身で新潟に戻った。

ご自身、がんの予後外来に通院しながら、当事者の立場から「介護しつつ自分の人生を大切にしたい。介護される側の人生も大切にしたい。そんなシステムをつくりたい」と話したことが地元紙に大きく掲載され、多くの賛同者を得た。これにより有償による助け合い活動が始まった。

編集部が訪問した日、うちの実家には地元の新潟県立大学の学生グループや、国際メデイカル専門学校の学生たち五〜六人が居合わせ、それぞれ

た。地元小学校が社会授業の一環と位置づけ、小学四年生が「うちの実家」を訪れているため、遊びに来ていたものだ。

こうした地元学生たちの実地研修日程などが書き込まれた予定表が壁にたくさん張られている。十一月〜十二月のスケジュールを見ると、県内の社会福祉協議会一行のほか、埼玉県や三重県内の自治体関係者、愛知県のNPO団体の視察など研修・来訪日程が目白押しに並んでいた。

時折、閑静な住宅街に観光バスで視察に訪れる議員さん一行もあり、その時には近隣から借りる駐車場だけでなく、ご近所の協力を得る。

### プログラムなし、思い思いの時間を過ごす

特別なプログラムはなく、参加者は好きなことをして過ごす。障がいをもった人や認知症の人、そして子どももお年寄りも、それぞれが一緒に時間を過ごす。その中で、相手の不自由を知り、いつの間にか自然に助け合うようになっていく。

こうした活動が続いている理由を河田さんは「自分の実家に帰ったように、好きなように時間を過ごし、何もしなくてもいい自由さがあるからではないでしょうか」と語る。河田さんらの取り組みは今や、様々なメディアでも紹介されているためか、「地域の茶の間」はすでに新潟県内に二

# 商店街振興をめざす交流の場

—「カフェ・プレアーテ」のわがまちにおける使命—



NPO法人東海道・吉原宿カフェ・プレアーテ 店長

● 角田有崇

## シャッター街の打開に動き出す

現在、日本中の多くの地方商店街はかつてのにぎわいが消え、空き店舗が目立つシャッター街へと姿を変えてしまっている。ここ静岡県富士市の吉原商店街も同様に、十五年以上前から急速にまちの衰退が顕著になってきた。

二〇〇三年に設立されたNPO法人東海道・吉原宿は、そうした現状を打破すべく、一部の商店街有志と多くの市民を巻き込んで、様々な活動に取り組んできた。設立当初に手掛けたシャッターアートは全国から多くのアーティストが参加し、二十軒ほどの店舗に彩りを添えた。

それと同時に、空き店舗オーナーの理解度を図ることもなり、その後、複数の店舗に新規出店することにつながっていった。そのうちの一軒が、富士市立高等学校（旧吉原商業高校）ビジネス部が部活動として運営する常設店「吉商本舗」である。

二〇〇四年の開店以来、当法人と高校生による協働事業は七年以上が経過し、店頭販売だけでなく地域イベントへの出店や、多くの地場産品を活かしたオリジナル商品の開発、国際貢献活動に繋がるフェアトレード商品の取り扱いなど、全国的にも高校生ショップのトップランナーとして経済産業省「がんばる商店街七選」にも選定されたほか、様々な賞を受賞している。

また、低予算でのリノベーション事例として、複数の若者たちによるシェアオフィスの運営についても二〇〇四年から実施し、現在ではその活動の中から三つのNPO法人が誕生している。

その他、二〇〇八年より「富士市民活動センター・コミュニティf」の指定管理者として、公共施設を民間ならではのアイデアで運営。開館六年間での来館者数十万人のうち、指定管理者となった三年間で七万人以上を達成し

た。

さらに現在では、市の施設のレベルアップも視野に、二〇一〇年より静岡県が設置した「ふじのくにNPO活動センター」の管理運営も手掛け、新しい公共のための基金運営の事務局も任されている。

## 企画の発信源と受け皿の役割担うカフェ

こうした活動の多くは、地域における多様な担い手に参加できる器としての機能を様々なシーンで提供することにある。

二〇一〇年一月にオープンした「カフェ・プレアーテ」は、これまで商店街に無縁、あるいは離れそうな層を対象に、新たなコミュニティを創り出し、周辺店舗との連動で商店街のファンを育成していくことを目的にした「コミュニティカフェ事業」である。



カフェ・プレアーテの入り口

まず、コミュニティの場を広げるための企画を提案する「発信源」として、次に場を提供する「受け皿」として、「入口と出口」の両方の役割を担っている。

例えば、店内イベントの名称を「ヨシワラ大学」と称し、「食育学部」として「食の安心・安全啓発イベント」を実施。その後も店側が仕掛けるというよりも、専門知識を持った来店者による持ち込み企画として、外国語学部や歴史学部などがカフェの気軽な雰囲気なかで、開催されてきている。

中でも、ワインアドバイザーによる「ワンナイ



毎月大好評の「ワンナイト・ワインバー」

ト・ワインバー」は、SNSといった新たなコミュニケーションツールを活用することで、毎回告知直後に定員になる盛況ぶり、毎月の恒例イベントとなっている。

また、「ヨシワラ大学」の名称は、今年から店内のイベントだけでなく、まち歩きのカフェ講座にも広がりを見せている。

企画自体は「やりたい人が楽しくやる」というスタイルをとり、単なる「コミュニティスペース」の貸し出しではなく、主催者自身が「主人公」となる「ストーリー」のある生きたコミュニティスペースづくりを行っている。

### ◆◆◆ コミュニティの拡大を目指して

開店当初から開催している「商店街周辺の飲食店ツアー」は、婚活をテーマに取り込み「YWG P (吉原ワ

クワク合コ

ンプロジェクト)

として実施し

ている。六

回目を迎え

る今年十一

月には、参

加者三百

人、参加店

十店以上を

数え、さま

ざまな店舗

が



名物メニューにご当地B級グルメ「つけナポリタン」

を巡りながら、若者に出会いの場を提供。商店街に新しい「風」を吹き込むキッカケづくりを行っている。

また、今年二月からスタートした「吉原バル」は先進地である函館に習い、さらに幅広い年齢層を巻き込むことを狙った街中はしこ酒イベントである。二回目の八月には参加者が五百人、参加店も三十店に達し、お酒を酌み交わしながら「世代間交流を楽しむ場」としての商店街という、かつて確かに機能していたコミュニティの復活につながる催しとなった。

さらに、同時開催された音楽イベント「吉原ジュークボックス」は、至る所での街角コンサートと複数店舗での同時多発ライブ。参加アーティストも四十組を数え、ジャズ、クラシックから昭和歌謡にクラブDJまで、オールジャンルの音楽が街中にあふれる一日となった。

商店街の活性化からスタートした活動は市内外へも飛び火し、地域密着型の体験プログラムを提供する「富士山博覧会(フジバク)」にも結実していくなど、増々多様な展開を見せている。

このように様々な人が集まり、そして化学反応を起こしていく「場」としての商店街。その商店街に位置するカフェこそ、自店の利益だけを追求するのではなく、地域も一体となった総合的コミュニティを造りあげていく役割があると考えられる。それが、「コミュニティカフェ」である「カフェ・プレアール」のこのまちにおける使命である。

\*「カフェ・プレアール」 電話：0545-57-5175  
TEL 417-0051 静岡県富士市吉原2-11-7

# 生きづらさを持つ若者たちの支援カフェ —ひきこもりや発達障がい者に「居場所」提供—

富山YMCAフリースクール 講師  
くさくらカフェ担当 特別支援教育士 ● 加藤愛理子

## はじめ

私たちの富山YMCAフリースクールは、平成元年（一九八九年）に始まった。予備校形式で、現在では不登校や高校中退のこどもたちが五十人ほど在籍している。私が国語の講師を始めた十八年前は、子どもたちと接するのは授業の時間だけで、おしゃべりすることもできない。そこで、ランチ会を始めることにした。

私が大きなお弁当箱におかずを詰めて持っていく、スクールでごはんを炊く。昼になると、事務室前の丸テーブルに子どもたちが集まってくる。夜は暴走している子、家族と何年も食事していない子や、摂食障害の子もいる。

食べても食べなくても、この丸テーブルを囲んでの昼のおしゃべりタイムは大盛況。そのうちに、「料理教室」をしようということになり、スクールのビルの大家さんが「家庭科室」として空き店舗を提供してくれた。

その空き店舗は、なんと業務用冷蔵庫、テーブルや椅子まで完備していた。床を張り替え、掃除が終わったとき、まさしく「店」が出現したのだ。無謀にも「カフェやろうよ」という声があり、さまざまな交渉と保健所の許可を経て、平成十五年五月に開店した。

ここでは、生徒として働く練習をする若者もいるし、客として来る人もいる。火・金のランチのみ営業という中途半端なこのカフェは、生徒のお母さんボランティアに助けられて、学習だけのスクールでは受け入れられなかった人たちの「居場所」を、町の片隅に提供することになった。

## 新たな展開

五年目に、調理師と保育士の資格を持つボランティアお二人が入ってくれた。無農薬玄米や古代米、野菜をたっぷり使った「からだに優しいランチ」の評判はよかったが、突然、この店舗が老朽化のため取り壊されることになった。これで終わ

りかと思ったが、この活動が継続できるようにYMCAがフリースクールと同じビルの七階に新しいカフェを作ってくれた。

大きな窓から立山が見える新しいカフェは、富山県産の杉で作られており、靴をぬいで入る。杉の香りがほのかにする気持ちのいい空間である。しかし、七階でもあり、ビルの入り口も奥まっているため、なかなかお客さんが入らない。どうしていいかと悩んでいたときに出会ったのが「コミュニティカフェ」という言葉だった。

## コミュニティカフェとして動き始める

単なる「カフェ」と「コミュニティカフェ」の違いは何だろう——。

公益社団法人長寿社会文化協会(WAC)のホームページを見て感じたのは、「カフェ」そのものにすでに「コミュニティ」を作り出す機能が備わっているということだった。つまり「コミュニティカフェ」になるには、自分たちで「コミュニティカフェである」と宣言し、その方向性を見据えればいいのではないかと思った。

そこで「コミュニティカフェ」をくさくらカフェ」という言葉を使いつつ、「生きづらさを持つ若者たちの支援カフェ」として、ひきこもりや発達障がいへの支援なども積極的に行うようにした。

その後「鬱」の自助グループが、このカフェで、毎週火曜日の午後、相談会やミーティングを開くようになり、お客さんは確実に増えてきた。

しかし、すぐ壁にぶつかった。自分たちだけが「コミュニティカフェだ」と宣言しても広がって



カフェのスタッフたち



ランチメニュー

いけないのだ。私たちのカフェには、相談や居場所探しの人が多いが、遠くから来る人の日常の居場所にはなりきれない。また、高齢者、子育て中のお母さん、若者たち、子どもたちなどの居場所の役割を一つのカフェだけでは果たせない。

悩んだ結

果、たどり

ついたの

は、県内に

仲間の「コ

ミュニティ

カフェを

増やして、

つながれば

よいという

ことだっ



ランチを楽しむお客さんの様子

た。「コミュニティカフェ」を増やすというのは、何も新たに作ることはない。「コミュニティカフェ」という言葉に興味を持ってもらえばいいと考えた。

### コミュニティカフェをつなげていく

物事の流れは不思議である。縁あって、大人の学び舎「LiTaClub」（前ポエシア・ブランカ）を運営する若者、平木柳太郎さんと富山コミュニティカフェネットワークを作ったところ、WACからマザーカフェ事業をしないかという依頼がきた。それは、まさにコミュニティカフェをつなげる新しい試みだった。

「コミュニティカフェ」という言葉が浸透していない富山では、初めは反応も芳しくなかった。

それでも、一人

ひとりに説明を

し、四十ほどの

店と居場所を「

コミュニティカ

フェ」として掲

載したガイド

ブックを作成し

た。

また、富山型

デイサービス

「にぎやか」の

理事長である阪

井由佳子さんが

率いるバンド「

イワズモガナ

」にコミュニ

ティカフェの

テーマソング

「そっとほっ

とカフェ」を

作って歌って

もらった。

その成果も

あって、一年

たった今「コ

ミュニティカフェ

」という言葉が、富山で歩き始

めている実感がある。この歩みを止めないために、

今年一月から「そっとほっと通信」というフリー

ペーパーを月一回発行し始めた。一マス千円を出

し合って、毎月約二十団体がこの通信で「コミュニ

ティカフェ」や「居場所」「イベント」情報など

を発信している。

「コミュニティカフェ」は生きものである。その一つひとつも日々成長するが、それがつながって

いくとき、さらに新たな息づかいが聞こえてくる。今年、大変な試練を受けた日本であるが、地

域の新たな息吹を作っていく可能性がこの「コミュニ

ティカフェ」にはあると思う。

それぞれの運営が大変で、「ネットワークどこ

ろではない」という現実もある。しかし、つなが

ることで見えてくる打開策もある。現在、そのこ

とを理解してくださる人が増えてきて、県を越え

るネットワークも広がりつつある。今後、この中

で何が生まれてくるか、楽しみは大きい。



月1回発行している「そっと・ほっと通信」

# 女性が一步を踏み出す場として

## ―子育て支援などママたちの交流拠点に―



NPO法人びいめくる企画室 理事（前理事長）

小川泰江

スタートは情報誌作りの活動

びいめくるという変わった名称は、琵琶湖の「び」に、女性という意味の「フイメール」、通信の「メール」をかけあわせた造語である。

この名のとおり「滋賀に住む女性が、自分らしい一歩を踏み出すための情報を提供する」が活動理念である。びいめくるのスタートは一九九七年。子育て中の母親たちの「あったらいいね」である。滋賀は京阪神のベッドタウンとして流入人口が大変多いところである。

私自身も夫の転勤に伴い、幼い子ども達を連れて知り合いが誰もいない滋賀にやってきて、欲しい情報が全



情報紙「びいめくる」

く手に入らず困り果てた経験をした。

それを当時所属していたママサークルのメンバーと話していたところ、「無いのなら、自分たちで作っちゃおう！」ということになり、気軽なりのりで始めたのが最初の一步である。

七名でスタートした全く素人の情報紙作りから活動は広がり、現在は滋賀県全域に散らばる六十名のスタッフと、フリーペーパー「びいめくる」（隔月二万部）の発行、ホームページと情報検索サイトの運営、マスメディアでのコーナー担当、出版、セミナーやイベントの企画運営などに取り組む事業型のNPOとなっている。

コミュニティカフェ作りに挑戦！

そして二〇〇四年からは、今回のテーマである「コミュニティカフェ」の運営にもチャレンジすることとなる。きっかけは、JR栗東駅前にあるテナントビルの空きスペース活用を、商工会が募集したことである。当時、栗東市内に拠点を構え

ていたびいめくるにも声がかり、パツと思いついたのが、「カフェ付きの交流スペース」であった。

栗東駅

前の抱える問題。それは一九九一年の新駅設置に伴い開発された新しいまちで、増え続ける人口に追いつかない行政サービス、コミュニティ意識の希薄さなどだ。これらの解決にも一役買えるのではないかと考えた。また、びいめくるもメンバーの固定化という問題を抱えており、これまでのメール中心の活動から、「Face to Face」へ転換する必要に迫られていた時期でもあった。

そして何より、私自身も将来「カフェ」を開くのが夢だった。そんな一石三鳥のプランが「カフェ付きの交流スペース」＝「コミュニティカフェ」であった。私の頭の中には「あったらいいな、こんなカフェ」のイメージが明確に描き出され、それを見よう見まねの企画書にまとめて提出したのである。

とは言え、こんなプランが保守的なイメージの強い「商工会」という組織に受け入れられるとは、



講座の託児の様子。シッターさんもママ仲間

思っていなかった。それが、当時の事務局長が共感してくれたこともあり、理事会をあつさり通過。最初の話から一カ月後にはカフェ作りがスタートしたのである。

情報紙を立ち上げた時も全くの素人だったが、カフェを作るのも初めて。資金は以前いめゝるで出版した本の売り上げストックと、スタッフ三人からの個人的出資を合わせて二百万円を捻出した。「好きに使って」と提供された百五十坪のスペース。オープンまで一カ月半と言う期限。

設計は？ 工事は？ 厨房機器は？ 営業許可は？ メニューは？ 人は？ ——。山積みする問題を前に「絶対無理」と尻込んでいたスタッフも、一つ一つ前へ進んで行く中で、カフェのイメージ・思いを共有するようになり、最後は一丸となってカフェ作りに取り組む体制ができた。

### カフェオープンと経過

そして二〇〇四年十一月、「コミュニティカフェ Be-caffe & 市民交流広場 WinWin」がオープンした。百五十坪の広い店内に、木工作家の大型遊具コーナー、絵本コーナー、会議室などが配置され、入り口に十五坪のカフェスペースがあるという構造。当初メニューはケーキとパン、ドリンクとスープとできるだけシンプルにした。

交流や子育て支援など様々な役割を持つ場としたが、一番大きな役割は「女性が一步を踏み出す場」と設定し、地域の女性が日替わりでパンやケーキを提供する「ワンデイパティシエ・システム」を考案し、託児付きや女性向け講座を開催。二〇

〇五年には、内閣府男女共同参画局の「女性が輝く地域づくり事業」にも選定され、女性起業家セミナーやチャレンジショップ・イベントを開催した。

その後、ビル全体のリニューアルに伴い、正式テナントとして二階に移転。図書館の向かいということもあり、子ども連れはもちろん、本を借りに来たシニア世代まで様々な人が集う場として機能するとともに、商工会や地域の事業者と連携して駅前活性化委員会を作り、マップ作りやイベントにも取り組んだ。

二〇〇八年には、隣接する野洲市の県立公園内の空き店舗に「森のBe-caffe」をオープン。駅前とは全く違う自然の中での環境で、「ここならでは」の企画として、石窯プロジェクトや手作りの開催、地元の素材を使ったオリジナルソフトクリームやスイーツ作りにもチャレンジしているところである。

二〇一一年には、経営上の事情から栗東を撤退し、森のBe-caffeにびいめゝるの事務所も含めて移転・統合した。



初代Be-caffeの店内



森林公園の中にあるログレストラン「森のBe-caffe」

### 広がる輪

「Be-caffe」の立った波紋は、様々なところに輪を広げている。一つは、行政の委託事業として四年にわたって企画運営しているコミュニティカフェ開業講座である。卒業生は自宅カフェを開業したり、イベント出店したりと、県内各地で活躍し、新たな女性の社会参画の形として、注目されている。また、Be-caffeを参考にした「姉妹店」とも言えるコミュニティカフェも、県内で二件、東京で一件オープンしている。

最近では、「コミュニティカフェによる公共施設活性化事業」として、県立近代美術館や男女共同センターの空き食堂スペースへの出張カフェなどにも取り組んでいる。カフェでの経験を基に、調理師免許を取得したり、講座講師として活躍するスタッフも出てきており、「一步を踏み出す場」として、一定の成果を達成していると言える。

これからの人口減少社会では、これまで「社会を支える側」とみなされてきた女性や高齢者、障がいを持った方などの社会参画が不可欠である。そのエンパワーメントと活躍の場として、行政に頼らない自立経営できるコミュニティカフェの役割はいよいよ重要となってくるはずである。

地域ごとにそんな「場」がある社会を目指して、一步一步進んでいきたい。

# 認知症支援の「場」として役割果たす ―人がつながる「なごみわ喫茶室」の活動―

NPO法人ビー・ジミなみ（ソーシャルワーカー） ● 夏川恵美

NPO法人ビー・ジミなみは千里ニュータウンの新千里南町の住宅街にある。南町は千里ニュータウンのまちびらきから四十年以上が過ぎ、地域には老朽化した団地とともに、そこに長年暮らしてきた人びとの姿が残っている。

近年は、団地の建て替えが始まり、新たな局面を迎えている。現在三〇%を超える高齢化率が物語るように、高齢者の姿が目立つ地域である。

「老後もこの街で暮らしたい」が原点に

ビー・ジミなみは、南町での生協活動で知り合った主婦たちが「老後もこの街で暮らしたいね」という思いから、平成元年（一九八九年）に立ち上げたボランティア団体である。

当初は生協活動での経験を活かし、食の安全にこだわった昼食会や弁当の宅配などを地域のお年寄りを対象に行っていた。これらの活動を通して、認知症のある人たちやその家族に出会い、認知症ゆえにデイサービスを利用できず、取り残されて

困っている現状を知ることになった。

その後、訪問ヘルパー事業、週一回のデイサービス事業に取り組み、家族からの思いを受けて平成六年、南町の団地の一室で本格的なデイサービス（週五日）を開始した。デイサービスの利用者は認知症のある方を対象とし、その流れは平成十三年の介護保険事業介入後も認知症対応型デイサービスとして現在の活動へつながっている。

長年の認知症デイサービスでの活動や利用者家族との対話により、配偶者や兄弟姉妹、身近な友人との別れが認知症に深く関わっているのではないか、という認識をもつようになった。

成長した子どもたちは独立し、親世代が残った結果、高齢化が進み、独居高齢者も増加している南町の現状とも重ね合わせて、地域やそこに暮らす人びとの間に潜在する課題が次々と見つかり、それらを解決する「場」が必要である。

そんな思いから、平成十八年、デイサービスの隣にNPOの事務所を兼ねたコミュニティカフェ「なごみわ喫茶室」をオープンした。喫茶室には、

地域の人たちが立ち寄って、顔なじみができるような「人と人のつながりづくり」の促進を期待していた。

モノづくりは人とのつながりづくり

なごみわ喫茶室は「和輪カフェ」として、月一回（日曜日の昼）、クラシックギターや歌声喫茶とお茶会というスタイルで始まった。

多くはないが、毎回参加者があり、新しい出会いがあった。参加者の中から、「日常的に利用できることがあれば」との声があり、平成十九年からは毎週金曜日に「なごみわ喫茶室」をオープン（午前十時～午後四時）することにした。

しかし、お客さんの姿がほとんどないという日が長く続いた。当初は喫茶室という「場」を設ければ、お客さんは来てくれると思っていたが、高齢者が多く、道行く人もまばらな地域では、「あそこで何かやっている」と気にはなるけれど、中へは入れない、という人がほとんどで、地域の人のとの「壁」を感じていた。

その壁を取り除くために、喫茶室の外へ出て、地域の



気候のよい季節はなごみわ市

人へあいさつや話をしたり、「介護相談所」を設置したり、休憩所としてベンチを置いたりして、少しずつ地域の人がこの「場」が何なのか理解できるような、必要なことを実践していった。

そのうちに、「介護で困っている」「車椅子をかしてほしい」という地域の人からの相談が増えた。その後も、何らかの目的があれば、喫茶室へ来やすくなるのではという視点から「古布」「牛乳パック」の回収や、それら回収物から雑貨づくりの仕事を目的に喫茶室への参加しやすい環境を作り出していった。

そのような経験から、「モノづくりは人とのつながりづくり」であると理解し、何か必要なモノがあるときには、まず喫茶室の参加者に「○○を探しているんです…」などと声をかけるようになった。創作した雑貨は喫茶室で販売したり、事務所の前で「なごみわ市」を開いたり、地域の人との交流に生かしている。

毎年、活動を振り返り、喫茶室利用の目的を常に考え、最近では「出会いポイントカード」と「手仕事ポイントカード」というポイントカードを導入した。ポイントが貯まれば金券として喫茶室の参加費や雑貨購入に使用できるようにして、参加を楽しんでもらえるように工夫を加えた。

「必要なときにここに来てくれれば…」という思いのもと、喫茶室の運営も六年が過ぎた。現在では、以前デイサービスを利用されていた方のご家族や、近所の主婦、定年退職された男性たち、老人会の人たちが金曜日になると「おはようございます！」「こんにちは！」と顔を見せる。

参加者は各々に針仕事や、読書、お友だちやス

タッフと話したり、自由に過ごしている。中には毎月、自作の川柳や絵手紙を創作し、喫茶室に展示してくれる人もいる。参加者は六十〜七十歳代が中心である。

### 喫茶室がデイサービスへの橋渡し役に

ビー・ジミみなみのデイサービスは定員十二人と小規模であり、利用者も他のデイサービスでの利用が難しくなった方や、家族の介護が困難になりつつある方が多い。日々の活動から、地域社会においての認知症への理解がまだまだ乏しく、認知症支援をする組織として、その現状を打破するようなことを実践しなければ…という思いをもつようになった。

地域の人たちが喫茶室へ参加することにより、隣から聴こえるデイサービスの「声」が自然と耳に届き、認知症への関心が少しずつ芽生えている。

また、デイサービスを利用することに抵抗感のある認知症の人は多い。

そのようなとき、ご家族に「コーヒーを飲みに行こう」とお誘いしてもらい、喫茶室でゆっくりコーヒーを飲んだ後、隣のデイサービスへお誘いする。すべての人に通じるわ



「なごみわ市」とデイサービスの風景



以前デイサービスを利用されていた方の息子夫婦

けではないが、うまく利用へつながることがあり、喫茶室がデイサービスへの橋渡しの「場」となっている。

### 参加者から地域の課題を学ぶ

喫茶室を運営したことで、人の往来が多くなり、デイサービスともども生き生きとしてきた。参加者からは「将来、何かあった時は頼むで」との声が上がり、私たちも「今、自転車を探してるんだけど…」などと、和やかな交流ができています。

最近では、地域の課題を参加者の会話から学ぶことが多い。団地の建て替えによる地域社会の変化や自分たちの健康のことなど不安に思っている人が増加している。そのような声に耳を傾けて、何をすべきなのか「がんばり過ぎずに」これから喫茶室を運営していきたい。

# 島民の島民による島民のためのカフェ ―改装した空き家を協働や創造・交流の拠点に―



株式会社しまの会社 代表取締役

● 兼頭一司

「しまでCafé」は、株式会社「しまの会社」が産声を上げてほどない平成二十年初冬、瀬戸内海のど真ん中、弓削島にオープンした。しまの会社は「島民の島民による島民のための会社」を合言葉に、島民七十人が出資、島民自身による運営でスタート。地域運営を地域住民の協働により行い、地域の自立を目指すものである。

過疎高齢化、産業空洞化など地域社会の課題の先進地である離島だからこそ、後から来る日本の多くの地域に先駆けて課題を克服することに意味がある。国と地方の財政が頼れなくなる時代であれば、なおさら住民の意思と力が必要になってくるであろう。

「島国の中の島国」上島町から  
日本全体に元気を送る

経済的な自立だけでなく、福祉や環境、教育など地域の営みを住民の知恵と協力によって工夫しながら、自分たちでまかなえるものは自分たちで何とかしていこう、というわけである。

そして弓削島を始め、地域課題の先進地である離島だけで構成される「島国の中の島国」上島町から、島国・日本全体へ元気を送ろうではないかという寸法だ。

たとえば、経済的な自立など一口で言っても、一筋縄ではいかない。島には豊富な魚介や海藻類、柑橘を中心とした農作物など天然のおいしい食材は沢山あっても、現代の大量生産・大量流通の仕組みの中では、生産効率、生産コスト、物流時間に物流コストなどの面で不利な条件下に置かれている。

そこで、小ロットでも成り立つ流通経路の開拓や、付加価値によって高コストを吸収する工夫など、知恵と不断の努力が必要となってくる。

幸いなことに、離島をはじめ田舎には、効率とは真逆の価値である手づくりの温もりや顔の見える

関係が付加価値となったり、地域のために力を合わせて何とかしようという協働の土壌があり、これらは新しい価値体系や流通を含む社会システムを創造しうる可能性をもっている、と私は信じている。

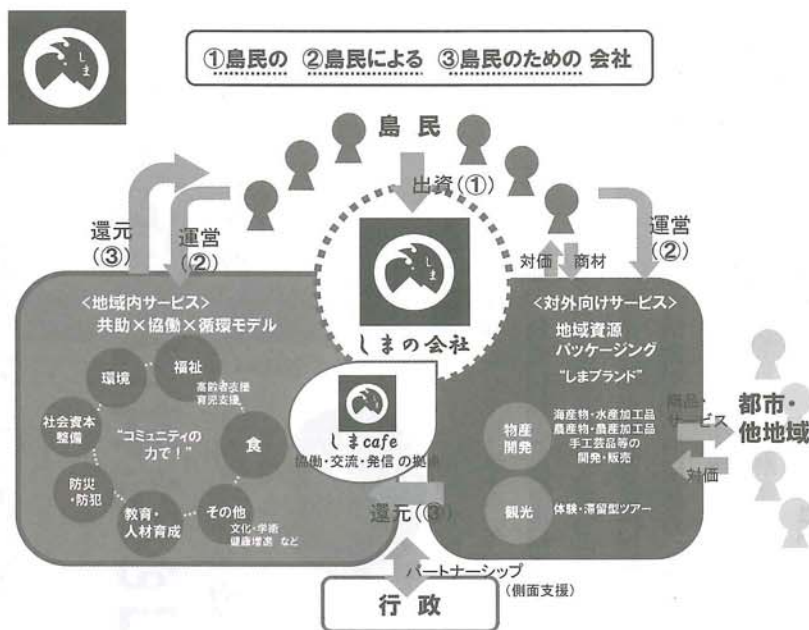
カフェを地産地消の拠点にも

その協働や創造、そして交流の拠点として、目に見える「場」を作ろうと、空き家となった古い民家を改装してできたのが「しまでCafé」である。「しまでCafé」はまた地産地消の拠点でもある。島の資源である新鮮な食材を、一流のシェフ、ならぬ島の腕利き「シェフ」たちが、愛情をソースに、島の温もりをスパイスに料理している。ただし家庭料理ではなく、実際にプロのシェフにみっちり指導してもらってスタートした。

定番メニューは、上島町内の岩城島で育ったレモンポークを使ったママズランチ、獲れたての地



しまでCaféの内観



しまでCafé コミュニティ



「摘み菜」模様

は放っておけば、いわずばただの雑草。これほど見逃しがちな足元の資源を再発見し、活かす地域の取り組みの代

第三に、この取り組みは子供たちを巻き込み、地元学や食育の役割を果たし、高齢者を巻き込んで健康を作るなど、教育や福祉の機能も持っている。しかも「摘み菜」

### 「摘み菜」の聖地めざす取り組み

第二に、この取り組みは住民主体で取り組まれてきたことである。季節ごとに島のどんな場所どんな植物が生えていて、それが体にどんな風に良くて、どんな料理の仕方であれば良いのか、住民が自分たちの足で島中を歩いて一冊の本にまとめた。

活かしている。それほど大きくない弓削島では、歩いて行ける範囲に、海の自然も野山の自然も溢れている。つまり野の草花も、山の山菜も、海海藻も数時間もあればすべて摘んで来られる。もちろんそれを摘む人もコンパクトな地域の中に集まって暮らしているのである。人と自然と暮らしの営みがコンパクトに凝縮された島の特性をととても活かした取り組みなのである。

表事例はないであろう。私たちは弓削島を「摘み菜」の聖地とすべく、「摘み菜」を商品開発や、観光、教育、福祉に役立て、食、暮らしにおける自然との共生の象徴的取り組みとして島内外の人たちに広く親しんでもらおうと奮闘中である。

現在、地域の課題解決に、みんなで学び合いながら取り組む「しまの大学」において「摘み菜学部」を設置するなど、「摘み菜人材」の育成をはかりながら、「摘み菜」を活かした地域活性化に取り組んでいる。「しまでCafé」でも、摘み菜ランチや摘み菜スパゲッティ、「摘み菜模様」摘み菜の小皿料理二十二品（要予約）などを提供しながら、高齢者向け宅配サービスに「摘み菜」を取り入れたり、「摘み菜」を使ったお茶、ジャム、甘酢漬、クッキーなど商材化を実現したり、「摘み菜ツアー」を実施したりしてきた。

### 島内外の人々との交流から生まれた取り組み

これらの新たな取り組みが、島の資源をベースに生まれたのも、「しまでCafé」に集う島内外の人々の出会い、交流からなのである。「摘み菜」に限らず、コラボレーションによる商材開発、耕作放棄地の再生や空き家活用など地域課題解決のためのプログラム、芸術展やシンポジウムなどのイベント等々、たった三年間の間に随分と沢山の取り組みが、ここで産声を上げたのである。そしてこれからずっと、腕利きシユフによる島の味と、人と人の新たな出会い、スタートを「しまでCafé」は見守り続けることであろう。

人と人がつながるコミュニティカフェ  
——「居場所&学び場」カフェ型保健室しらかば——



NPO法人小町ウイング 代表理事

当団体は、地域づくり団体として平成十二年三月に設立された。十年間、任意団体として地域資源を活かしたまちづくりの活動を継続してきた。なかでも、里山の再生や日本一の西瓜の生産出荷量を誇る町の課題に向けた活動では、当団体の「ス



スイカでハロウィン祭

イカでハ  
ローウイ  
ン」という  
イベントか  
ら町の「す  
いか祭りイ  
ン田原坂」  
と題した祭  
りへと進展  
した。

「植樹に  
よる里山の  
再生」「観  
月会コン

芸療法」など、様々なイベント活動を通して顔の見えるコミュニティ再生に取り組み地域に貢献した。植木町は、二十二年度に平成の合併で熊本市となった。来年度は、特例政令都市になる。

そんな中でのカフェ型保健室に取り組んで五年目になる活動を紹介する。

## 「地域の縁側」としてのカフェ型保健室

「介護保険に認定されん者は、どこにも行く場所がなか」「家族は仕事に行っておらんし、友達  
はデイサービスに行くし、死んでしまっておらん」  
「公民館に行っても何しに來たな」と言われるし」  
という相談が相次いだ。

昔は縁側に座って話しこむ情報交流の場があった。最近では、辺りを見渡すとカーテンが閉められ、人は入りにくい環境となってきた。しかし、人との交流を求めている人がたくさんいることも分かった。

介護保険外で気軽に  
お茶を飲みながら、  
ゆっく

りとした時間  
間で話を聴  
き、保健・  
医療・福祉  
の専門職を  
活かした相  
談ができる  
「居場所」  
を近所につ  
くろうと仲  
間と共に開  
設した。



子どもとお年寄りが交流

周辺地域は、十九年ほど経つ希薄な関係の新興住宅地である。ここでも独居や夫婦世帯が増加している。「馴染みの関係」や「住み慣れた地域で暮らす」などの文言はたくさんあるが、それを構築するための仕組みはなかなかない。

新しい地域福祉の挑戦である。超高齢社会と少子化、追い打ちをかけるような震災や経済的不安、新たな互助が必要である。これがコミュニティカフェや「縁側」という居場所である。

私は昭和五十八年、老人保健法の改正に伴う訪問指導を実施するために、ある地域で地域診断をしたことがある。『寝たきり老人』と言われていた人がどのような状況で寝ているのか、どのような疾病で寝ているのか——などを調査し、家庭看護教室などを開催した経験がある。今の介護保険の前進である。

介護福祉士の養成や看護教育を経て、介護保険制度で訪問看護ステーションの管理者としての経験を活かし、これからの長寿社会の課題を考慮し

た「居場所」の必要性を感じてこの取り組みを開始した。自治会長や民生委員になりたくない人たちが増え、個人主義の時代になりつつも、居場所があれば参加したい人たちがいるのも事実である。そんな地域で仲間を作って知恵を出し合いながら、アドバイスをし、学び合いの場とした癒しの空間を提供している。

### コミュニティカフェ講座

熊本県では「地域の縁側」として、ハード面やソフト面の助成をしている。カフェ型保健室しかばはこのハード面を活用した。(十九年度)運営は利用料二百円(お茶・菓子付き)、相談料一時間千円である。会員会費や地産地消の野菜の収益や助成金等で賄っている。

広報は、毎月行政区の掲示板や回覧板を利用している。講座の内容は「介護保険講座や後期高齢者医療」など制度に関しては、行政や地域包括支援センターの担当者を招いた。



食事バランス講座

男性は制度や歴史講座に関心が強く、女性は食文化に関心が高い。一人暮らしの人は、みんなで食事を楽しむことにしている。このよう

な講座は町の栄養士や生活改善グループにお願いした。地元のおばあちゃんから教えてもらった薬わらづと草つくりや納豆づくりからは、経験できない知恵を学ぶことができた。

最近では、照れくさそうな壁を乗り越えて「そば打ち」や「団子汁」など、男性が率先して力を発揮している。その様子は、まるで家族のようだ。参加者の中から観光ガイドや過去の仕事・趣味のノウハウを活かしたシニアライフ講座の自主講座をしてもらっている。

### 健康チェックは毎回実施

保健室という特色を生かし、健康チェックは毎回する。健康に関する皆の意識は高く、筋力強化のタオル体操やお笑い体操などは好評である。介護保険の利用をしている「要支援」の参加者を皆で支え、その人の関心事を引き出して自然な関係が築け、生活の質が改善するなど成果が出ている。「パーソンセンタードケア」である。

また、年々減少している小学生たちも長期の休暇には、ここを訪れて世代間交流やワークシヨップ等に参加している。子供が参加することになり、やかになることや、高齢者の優しさを子どもたちも学んでいる。

居場所としての取り組みが新聞やテレビ、ラジオ等に紹介されて地域力が育つことは大変いいことである。「ビジネス化が課題である」とメディアも報道している。地域の実情や共に支えることの実践がキーワードである。

例えば、着物を洋服にリフォームしてシニアの

生きがいづく

りにチャレン

ジするように

なった。布草

履を作製して

居場所の活動

費を考えてく

れるように

なった。こう

した実践の中

から、支え合

いを思う人が

育つ。地域資源は「思い」であり「人」である。

人に見える形にすることで、地域の支え合い、互助機能がでる。例えば、参加者の顔が見えなると安否確認をし、互いに心配されるようになるなど希薄な関係が改善した。

これからの時代ニーズは、形よりも質が求められる時代である。行政にも市民のパイプ役として自分たちのまちづくりの目線で地域社会を共に考えて協働してもらいたい。

居場所・コミュニティカフェで馴染みの関係が深くなったことは、高齢社会の大切な資源となる。持続可能な地域の拠点にしていくには、経済的にも安定した運営ができることが必要である。

まずは、ネットワークの取り組みとして、昨年熊本市でコミュニティカフェフェスタを開催した。コミュニティカフェを分かりやすく仲間と寸劇をして、さらにつながりができた。全国の様々な取り組みが広がり新たな地域づくりができることを期待したい。



昨年開かれたコミュニティカフェフェスタの様子

# 情報交流とゆるやかなネットワークづくり目指す

## —WACのコミュニティカフェについての取り組み—



公益社団法人長寿社会文化協会(WAC)  
コミュニティカフェ全国連絡会事務局

● こんぶやま  
昆布山良則

皆さんは「コミュニティカフェ」をご存じだろうか？ 子どもからお年寄り、障がい者まで、幅広い年代層、立場の人が自由集える地域の「たまり場」「居場所」「茶の間」「サロン」といったところを、公益社団法人長寿社会文化協会(WAC: Wonderful Aging Club)では「コミュニティカフェ」と総称している。

人々の行動が多様化し、地縁・血縁に頼れなくなっている現在、地域のきずなを取り戻し、地域コミュニティの再生に役立つ場として注目されている。WACは、全国のコミュニティカフェの情報交流とゆるやかなネットワークづくりを目指している。

次頁の図に、これまでと現在のWACのコミュニティカフェについての取り組みをまとめた。本稿では、この図に沿って述べていこう。

WACは、少子高齢化が急速に進む中で、元気なシニア世代が中心となり、豊かで活力あふれる

長寿社会を構築していこうと、一九九八年に設立された高齢化問題に関する民間第一号の社団法人である(二〇一〇年に公益社団)。いくつになっても元気で、人と人とお互いに助け合える地域コミュニティの再生を推進している。

全国にポイントと呼ばれる趣味やスポーツ、ボランティアなどの活動拠点を約九十カ所もち、千人ほどの会員を擁する。

### 「地域の茶の間」の活動に注目

地域の助け合い活動を推進していくためのヘルパー研修や子育て支援、高齢者の身体や心を理解してもらおうと、高齢者疑似体験や認知症疑似体験の普及、会員誌「ふれあいねっと」による情報提供などに積極的に取り組んできた。

また、そのネットワークを基盤として、健康麻雀サロン、シニアのためのパソコン教室、男の料

理教室を各地で開くなど、さまざまな活動を展開している。

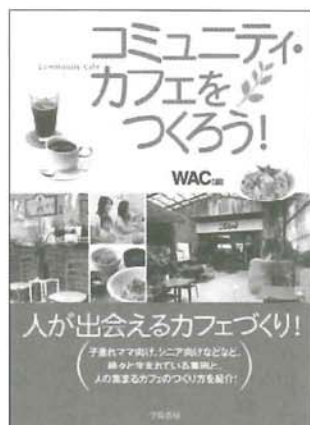
こうした中、WACは地域コミュニティ再生の決定打として、新潟市の河田圭子さんが提唱した「地域の茶の間」に注目し、その啓発・普及を図った。二〇〇二年と二〇〇三年に新潟市で、二〇〇四年には広島市で「地域福祉推進コロキウム」を開き、地域の茶の間についてのシンポジウムや見学会などを行った。

二〇〇七年度にも「地域密着型サービス調査研究」で全国各地のコミュニティカフェを訪問調査したり、ワークショップやシンポジウムを行ったが、コミュニティカフェについてのWACの取り組みが本格化したのは、この年のことである。

### 書籍やサイトによる情報発信を 活発化

コミュニティカフェの事例と設立・運営ノウハウ

図 WACのコミュニティカフェについての取り組み



コミュニティ・カフェをつくろう！

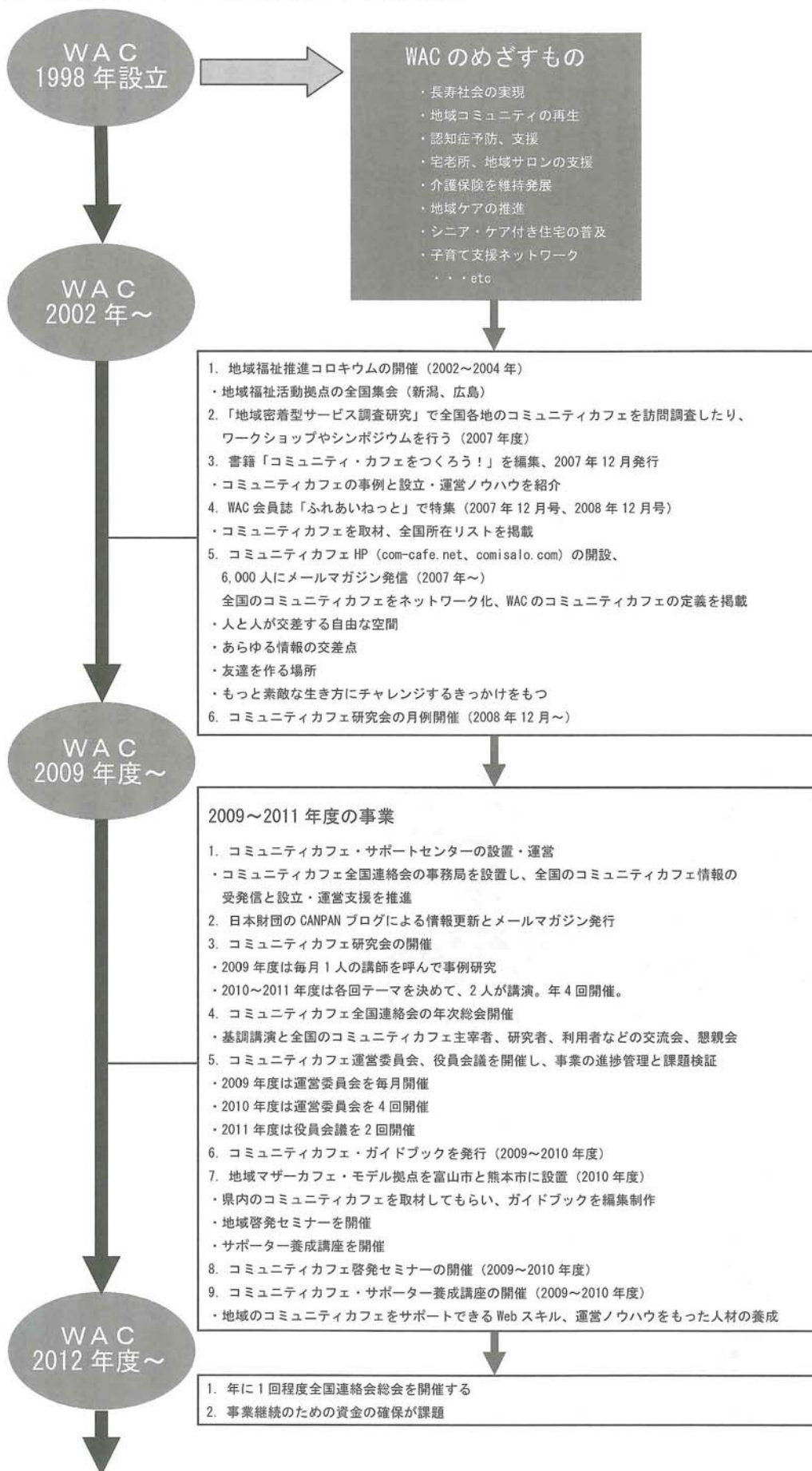


コミュニティカフェネットワーク・ガイドブック2010

ウを紹介する書籍「コミュニティ・カフェをつくろう！」をWACが編集し、二〇〇七年十二月、学陽書房から発行された。

WACでは最初、書名は「コミュニティ・サロン」を考えていたが、担当の女性編集者から「カフェのほうがおしゃれで、若い人にも受ける」との勧めがあり、「コミュニティ・カフェ」にした経緯がある。

それ以来、地域の「たまり場」などをコミュニティ・カフェと総称することになった（二〇〇九年になって、コミュニティカフェに表記を統一）。



なお、「コミュニティ・カフェをつくろう!」は毎年印刷を重ねて四刷となっている。この書籍の発行と連動させて、「ふれあいねっと」でコミュニティカフェを特集し、全国百六カ所のカフェのリストを掲載した。

同時にインターネット上で、コミュニティカフェについての総合情報サイト「com-cafe.net」とリンク集「comisalo.com」を起動させた。後者では、高齢者福祉、まちづくりなど十七のカテゴリーに分けて掲載している。

両サイトでは、WACが考えるコミュニティカフェを「人と人が交差する自由な空間、あらゆる情報の交差点、友達を作る(人的ネットワークを広げる)、もっと素敵な生き方にチャレンジするきっかけをもつ場」と定義付け、「同じような思いのカフェを見つけて、手をつないでいきたいと思っています」と全国のカフェに連帯を呼びかけている。詳しい定義は両サイトをご覧ください。

### ◆ ◆ ◆ コミュニティカフェ・ サポートセンターを設置

二〇〇九年度からは日本財団の助成金を受けて、コミュニティカフェの啓発やネットワーク化を日常的に推進している。

WAC事務局内にサポートセンターを設置し、電話やメールで開設相談を行っている。大体は相談者の近くのカフェを紹介して話を聞くよう勧めたり、前述の書籍を紹介したりするが、専門的に手に負えない質問の場合には、コミュニティカフェ全国連絡会のブログやメールでカフェの仲間に回答を呼びかけることもある。

報道関係からの問い合わせや取材も多く、担当理事や事務局が応じている。テレビ局から「自宅の空き部屋でカフェを開いている人」「早朝から開いているカフェ」を紹介してほしいなどと頼まれて探すこともある。記事や番組で紹介されたことはすべてブログに掲載しており、約五十本に上っている。また最近、大学の先生から調査の協力依頼、学生からは「卒論を書くので、話を聞かせてほしい」といった依頼が増えていくが、事務局では可能な限り協力している。

今春、WACが全国のカフェに協力を呼びかけ、大分大学福祉科学研究センターが「コミュニティカフェの実態に関する調査」を行った。調査により、小規模、スタッフの確保、建物の老朽化対応、赤字の解消などの課題が浮き彫りとなった。調査結果が同センターのサイトに掲載されているので、ご覧いただきたい。

事務局が調査対象のカフェの選定に協力した、北海学園大学の教授による訪問調査も現在進行中である。

イベント・セミナー、関連記事・番組、書籍・資料紹介、カフェ紹介といったコミュニティカフェに関するほとんどの情報は、二〇〇九年四月に開設したコミュニティカフェ全国連絡会のブログに掲載している。ブログの情報は月に一、二回

発行するメールマガジンにも掲載して、約八千五百人に送っている。

### ◆ ◆ ◆ 研究会と総会を開催

コミュニティカフェ主宰者を呼んで、事例研究と成功モデルの検証を行う研究会は二〇〇八年十二月に始めた。二〇〇九年度は一人の講師を呼んで毎月、二〇一〇―二〇一一年度は各回テーマを決めて二人が講演し、年四回開催している。現在は勤労者も参加しやすい平日夜間に開いていることから、毎回六十人以上の参加がある。

これまでの講師と講演テーマを次頁の表に示した。次回は十二月十五日、「自宅カフェのすすめ」と題して、東京で開催する予定である。

また、コミュニティカフェのゆるやかなネットワークによる情報の共有を目的に二〇〇九年十一月、コミュニティカフェ全国連絡会の設立記念シ



コミュニティカフェ研究会



第2回コミュニティカフェ全国連絡会の交流会

ンボジウムと総会を開催した。全国各地からコミュニティカフェの主宰者、利用者、研究者、行政・社協関係者、これから始めたい人たちが百八十人余集まった。

「このような情報交換の場が本当に欲しかった」という声が寄せられ、二〇一〇年十一月の第二回総会の参加者は二百五十人に増えた。二〇一一年度は来年二月十一日（土祝）、東京で開催する予定である。

総会の参加者には、事務局が編集したガイド

### 地域のカフェのネットワーク化を促進

ブックを配布した。このガイドブックには、連絡会の共同代表である河田圭子さん（新潟市・常設型地域の茶の間「うちの実家」代表）と坂倉杏介さん（東京都港区・芝の家主宰）の対談記事や常設型の全国約八百カ所のカフェの連絡先、カフェの設立マニュアルなどを掲載している。

二〇一〇年度は、富山と熊本で県版のガイド

### ＜コミュニティカフェ研究会の講師と講演テーマ＞

#### 【2008年度】

- 第1回（12月）：田中尚輝氏（WAC常務理事）「コミュニティカフェの意義と展開」
- 第2回（1月）：園原一代氏（NPO法人ハートウォーミング・ハウス 理事長）
- 第3回（2月）：桑原三郎氏（NPO法人よろずや余之助 会長）
- 第4回（3月）：松田妙子氏（NPO法人世田谷子育てネット 理事長）

#### 【2009年度】

- 第5回（4月）：井上温子氏（大東文化大学 環境創造学部事務室 高島平再生プロジェクト 担当）「高島平再生プロジェクト・コミュニティカフェ『サンク』」
- 第6回（5月）：河田圭子氏（常設型地域の茶の間「うちの実家」代表）「地域の茶の間について」
- 第7回（6月）：瓜生ふみ子氏（NPO法人CCCNET 代表理事）「コミュニティカフェにおける子育て支援」
- 第8回（7月）：地域の茶の間の大交流会（新潟市・朱鷺メッセ）「コミュニティカフェの源流を探る」
- 第9回（8月）：鷺尾公子氏（NPO法人ぐるーぶ藤 理事長）「NPO活動と福祉マンション」
- 第10回（9月）：坂倉杏介氏（芝の家主宰）「大学・地域連携の『場』づくりー三田の家・芝の家を事例に」
- 第11回（10月）：江田雅子氏（NPO法人ぐらす・かわさき 事務局長）「地域のたまり場『遊友ひろば』～誰もが暮らしやすいまちを！」
- 第12回（11月）：眞板久美子氏、中村由美子氏（NPO法人福祉亭 理事）「地域の居場所づくり～人と人をつなぐ」
- 第13回（12月）：小泉圭司氏（元気スタンド・ぶりズム 店長）「7つの『元気』から介護予防のお手伝い」
- 第14回（1月）：島津禮子氏（NPO法人ふらっとステーション・ドリーム 副理事長）「地域の支え合い～ふれあいの居場所づくりについて」
- 第15回（2月）：吉岡淳氏（カフェスロー 代表）「カフェがつなぐ地域と世界」
- 第16回（3月）：天野敏子氏（不登校・ひきこもり研究所 代表）「安心していられる居場所づくりをめざして」

#### 【2010年度】

- 第17回（7月）：工藤明美氏（カフェ型保健室「しらかば」主宰、小町ウイング 代表）、平木柳太郎氏（街なかサロン「ボエシア・ブランカ」主宰）、加藤愛理子氏（富山YMCA「Y'sさくらカフェ」主宰）「地域の拠点・マザーカフェのめざすもの」
- 第18回（9月）：世古一穂氏（NPO法人NPO研修・情報センター 代表理事）、三浦香代子氏（ヘルシー・カフェのら 代表兼シェフ）、新井純子氏（ヘルシー・カフェのら 広場のら担当）「食の地域拠点としてのコミュニティカフェ」
- 第19回（12月）：桑山和子氏（NPO法人ぬくもり福祉会たんぽぽ 会長）、山田たみ子氏（コミュニティサロン「エコ工房ひだまり」代表）「市民事業の地域拠点としてのコミュニティカフェ」
- 第20回（2月）：牧野史子氏（NPO法人介護者サポートネットワークセンター・アラジン 理事長）、谷口奈保子氏（NPO法人ばれっと 理事長）「コミュニティケアの拠点としてのコミュニティカフェ」

#### 【2011年度】

- 第21回（6月）：河田圭子氏（常設型地域の茶の間「うちの実家」代表）、牧野史子氏（NPO法人介護者サポートネットワークセンター・アラジン 理事長）「震災復興支援とコミュニティカフェ」
- 第22回（12月15日）：富山昇氏（こみゆにていーパティオ海鈴 オーナー）、岩瀬はるみ氏（きまなスイーツカフェ 主宰）「自宅カフェのすすめ」

※役職は当時。

ブックも作成した。これは、各地域のコミュニティカフェを活性化、支援するハブセンターとしてのカフェを富山市のボエシア・ブランカⅡ現リタ・クラブとY'sさくらカフェ、熊本市のカフェ型保健室しらかばに定め、これらのセンターカフェが各県内のカフェをネットワーク化する手立てとして、地元のカフェを訪ねて取材してもらい、ガイドブックを編集してもらったものである。

センターカフェには、各県で数回ずつ、コミュニティカフェについての啓発と情報交流を行うイベントなども開いてもらった。

日本財団の助成金がなくなる二〇一二年度は、事業継続のための資金の確保が課題となつていく。しかし、企業のスポンサーへの参加を促したりして、年に一回は全国のカフェが集まる機会を設けたいと考えている。

### ■公益社団法人長寿社会協会（WAC）

コミュニティカフェ全国連絡会・事務局

TEL：03-5405-1502

Eメール：com-cafe@wac.or.jp

<http://blog.canpan.info/com-cafe/>



〈アンテナショップフェスティバル〉

## 23道県の美味が一堂に集結！

表参道・南青山で「ご当地自慢美味大市」

全国各地の特産品の販売、観光案内、レストラン運営をする自治体のアンテナショップは、現在、東京都内に五十以上あり、市町村や民間が設立・運営するショップも増え、「東京にいながら気軽に地方を感じられる」と根強い人気だ。

平成二十三年十一月三〜六日の四日間、東京の流行発信地にある表参道・新潟県ネスパス（新潟県）とふくい南青山291（福井県）の二会場で、「アンテナショップフェスティバル」ご当地自慢美味大市」が開催された。

平成二十年から始まり、三回目を迎える同イベントは、回を重ねるごとに参加団体が増え、今回は二十三道県のアンテナショップが地域の逸品を試食・販売した。

### 千円お楽しみ袋の販売

会場では、各ショップのブースが設けられ、売れ筋商品をそろえて販売している。普段は、各店舗



販わう表参道・新潟館ネスパス

を訪ね、何を買うかと悩むところだが、今回は品質、コストパフォーマンスとも良い商品を既にショップ側で選んでいる。二百円〜千円の商品がほとんどで、つい財布の紐が緩むようで、不況にもかかわらず好調な売れ行きである。

また、毎日、各会場で五十個限定販売される「千円お楽しみ袋」には、参加県の食品が袋いっぱい詰め込ま

れているとあって人気を集め、午前十時半の開場前には、お楽しみ袋を求めて行列ができ、一時間足らずで完売してしまった。

### 県自慢のスイーツコンテスト

今回の新しい取り組みとして、参加県が最も自慢するお菓子を出展し、ご当地スイーツの人気を競う「アンテナショップスイーツNO.1決定戦 ASS-1グランプリ」を開催。

ふくい南青山291会場で毎日十二時から先着百人までが参加し、「美味しい！」と思われるお菓子に投票する。二十三店舗（二十二道県・一市）から二十四種類のお菓子がエントリーし、参加者は全国の珍しいお菓子を試食しジャッジした。

その結果、秋田県の「まち子姉さんのごま餅」が見事グランプリに輝いた。美味しさに加えて、ゴマのヘルシーさが売りのこのお菓子は秋田県のアンテナショップ「あきた美彩館」でもナンバー1の人気商品だが、このイベントを通して新しいファンを獲得した。

現在、銀座・有楽町周辺には約十五以上のアンテナショップが集積しているためシナジー効果により集客



アンテナショップ・スイーツコンテストのエントリー商品

力が上がるが、品川にある秋田県のアンテナショップのように、その他の地域に点在するショップはどうしても、PRの機会が少ない。今回のフェスティバルにより、新規顧客の掘り起こしが期待される。

### 被災県に代わり販売する光景も

今回は過去のアンテナショップフェスティバルに参加し盛り上げてきた、東日本大震災の被災地（岩手県、宮城県、福島県）からの出展が叶わなかった。

「被災地の特産品を買って、支援をしよう」という動きが活発になり、三県のアンテナショップは連日盛況であり、デパート等からの物産展の

要請も多く、人材の確保等の体制が整わないのが要因である。

そこで、アンテナショップフェス



ふくい南青山291にてインタビュー 井上館長



東日本大震災の被災県の特産品を販売する他県の職員

ティパルの事務局では、参加できなくても可能な支援の方法を考え、岩手県、宮城県、福島県の東北三県の商品を仕入れ「応援コーナー」を設置し、販売には他県のスタッフが当たった。

南青山291の井上義信館長は、アンテナショップフェスティバル開催に至る経緯を次の通り語った。

「地方の品物を一度に買えるとお客様は楽しいだろうと思い、毎月開催されるアンテナショップの館長会で出展を募りました。規模は小さくても、まずやってみようと言うことでスタートしました」当初は、北陸を中心とした六県の参加だったが、現在は約四倍の二十三店舗に増えている。

その理由を井上館長は「他の業界と違って、同業のようであつても売り出すものが違うので、一緒に売り出すことに何の抵抗もありません。お互い助け合つて地域を盛り上げようという意識が強いので、今回のように参加できない東日本大震災の被災地の商品も他県が代わって販売しています。アンテナショップが増えれば増えるほど魅力が倍増すると思います」と語る。アンテナショップは、お互

いに良い部分を学びあうライバルでもあり、共に地方を盛り上げる拠点であると言える。

最近のアンテナショップの動向として、ショップごとのPRだけではなく、他ショップや民間団体と連携して様々な活動を行っている。

### 「地域の誇り」意識し情報発信

パンフレット「アンテナショップめぐり」の発行（有楽町・銀座アンテナショップ連絡協議会）、スタンラリー「ふるさとアンテナショップ巡りキャンペーン」（京王電鉄、東京メトロ、東京都交通局等十交通事業社局主催）や「アンテナショップスタンラリー」（東京都中央区主催）開催、都内各所の物産展参加

などがある。

だが、アンテナショップ自らが主体となつて、開催されるイベントは他になく、販売だけではなく「地域の誇り」を意識し、地域の情報を発信している。

現在、東日本大震災の被災県のアンテナショップは、大きく売り上げを伸ばしている。一方、その他のショップは景気悪化の影響で、「ついで買い」がないなど、絶好調とは言えないものの、運営は安定している。胸突き八丁の時期であるが、アンテナショップが切磋琢磨しながら、連携を深めていくことは、次のステップへの蓄積へとなり、ひいては地元の活性化につながると考えられる。

地域づくり情報課

● 島田千鶴

### アンテナショップフェスティバル 参加23店舗

| 表参道会場（新潟館ネスパス）7店舗    |               |
|----------------------|---------------|
| 北海道                  | 北海道道さんこプラザ    |
| 山梨県                  | 富士の国 やまなし館    |
| 富山県                  | いきいき富山館       |
| 島根県                  | にほんばし島根館      |
| 大分県                  | 坐来大分          |
| 熊本県                  | 銀座熊本館         |
| 南青山会場（ふくい南青山291）16店舗 |               |
| 青森県                  | あおもり北彩館       |
| 秋田県                  | あきた美彩館        |
| 山形県                  | おいしい山形プラザ     |
| 新潟県佐渡市               | 丸の内佐渡特選館      |
| 石川県                  | 加賀・能登・金沢江戸本店  |
| 茨城県                  | 黄門マルシェ いばらき農園 |
| 奈良県                  | 奈良まほろば館       |
| 鳥取県                  | 食のみやこ 鳥取プラザ   |
| 山口県                  | おいでませ山口館      |
| 徳島県・香川県              | 徳島・香川トモニ市場    |
| 香川県・愛媛県              | 香川・愛媛せとうち旬彩   |
| 高知県                  | まるごと高知        |
| 宮崎県                  | 新宿みやざき館 KONNE |
| 鹿児島県                 | かごしま遊楽館       |
| 沖縄県                  | 銀座わしたショップ     |

# ものづくりでまちづくり

## 工業集積地の再生／離反から融合へ



株式会社都市産業研究所代表 ● 伊藤清武

### 都市から離反した工業地

日本の近代工業化は、苛酷な労働を強いられていた年少者・女子雇用者の保護を目的とした工場法（一九一一）が制定された頃から軍需産業化、そして戦後の高度経済成長と共に急速に進展したが、その過程で工場のスプロール、公害問題を引き起こし、工業と都市が背を向け合う関係となってしまった。

まち中で生産現場が見えなくなり、ものづくりへの愛着が薄れ、若者のものづくり離れもあって、日本全体がものづくりの力を失っている」と懸念されている。

埼玉県では、明治末からの蚕糸産業が基礎となって地域に根ざした在来産業（地場産業）が発展した。戦後は東京からの住宅、工場の無秩序

な進展に対処するため住宅団地開発、工業団地開発を積極化し、草加でも当時、東洋一のマンモス団地と称された草加松原団地（一九六二）、県内工業団地の草分けとなった草加工業団地（一九六二）などが都市化の先駆となってきた。

その後、住宅と工場が隙間を埋めるように侵入し、マンション進出も著しく、騒音、振動、臭気などの公害問題に悩まされる。工場は騒音対策で昼間からシャッターを下し、ものづくりの風景が地域社会から隔離されてしまう。

近年、少子高齢化、グローバル化に伴い著しく経済活動が縮減するとの見通しから、改めて大都市への近接性が注目され、県南既存工業地の利活用が課題となっている。

### 多彩な工業集積・草加

東京に接する草加には、在来産業、都市型工業、首都圏の機械工業を支える基盤的技術工業など、多様な工場が、市内各所に立地している（煎餅、皮革、ゆかた、ねじ、紙・文具、建築造作など）。

例えば、江戸からの歴史を有する煎餅は、半減したとは言え、現在も数十社を数え、市内各地に煎餅店や加工場が分布している。

中でも草加八潮工業団地は、周辺の工業地域、準工業地域を含め、大都市近郊では珍しく、まとまった工業集積地を形成している。しかし周辺土地利用の高密度もあって、騒音・振動で周辺に何時も気を配り、増設余地も無いため、将来への不安を抱えながら操業を続けている。

そのため、新規事業展開や経営改革の意欲が低下している面も否めず、結果的に地域経済の停滞を招き、地域環境の改善を遅らせている面もある。大規模工場跡地の商業転換、空閑地への住宅の侵入なども多く、首都圏を代表する工業集積地をどのように維持していくかが課題である。

### 草加市が取り組む地域再生事業

市は商工会議所と連携し、住工共存の街づくりについて、継続的に取り組んできた。「うるおい工房認定事業」は、地域と融和し、地域から愛着を持たれる工場づくりを目指し、工場美化や植栽などの環境配慮、地域交流の場の提供、工場見学・作業体験の受け入れなどを支援するもので平成十年度から実施し、認定事業所は三十社をこえる。

「元気ある産業の街づくり」は、草加の優位な立地条件と技術集積の多様性から、①新たな知の交流の結節点となり、②暮らしを支え新たなライフスタイルを誘導する新産業を創出し、③市民レベルからの産業文化の醸成を目指す「居住と生産が共存するまち」づくりを産業界から発意したもので、その拠点として、草



フィールドワークの様子（株）渡辺教具製作所



フィールドワークの様子（伊藤産業(株)）

加八潮地区、獨協大学、松原団地、松原団地駅との連携を図りながら産業文化拠点（イノベーションコート）の形成も提唱している。

「今様・草加宿事業」（計画期間…平成十七～二十七年）／内閣府地域再生計画認定）は、旧日光街道に沿う草加宿・綾瀬川を基軸に、歴史や文化を活かした個性と活気にあふれたまちのにぎわい創出と魅力ある地域拠点の形成を目指し、まちなみ景観の形成、商業活性化、市民交流の場、防災広場の整備等を着実に推進している。

### 地域再生実践塾での学び

今回の草加・地域再生実践塾では、  
①工業集積地が直面する課題、②工業と地域社会との融和、③工業集積

地の再生の三点を検討テーマとして取り上げ、現場踏査や工場訪問を行い、つつ議論を重ねた。

初日は、草加の工業が直面する課題を取り上げ、地球儀メーカーの渡辺社長からは工場に開設されたミニ博物館を通しての地域貢献を、獨協大学岡村准教授からものづくりで情報発信の可能性を、そして草加せんべい振興協議会の沼口会長から地域と共に育ってきた煎餅の分業体制を学んだ。

二日目のフィールドワークでは、そうか革職人会伊藤会長の工場周辺環境に配慮しつつ磨き上げられている高度ななめし技術を見学、地球儀の生産現場では常に宇宙の知に取り組みむ若い従業者を、産業機械に組み込まれる空気圧縮装置部品工場では地元パートさんの熟練技が世界の製造拠点を支えていることを見聞することができた。

さらに草加八潮工業団地、団地福祉センター、ミニ工業団地を廻り大都市近郊工業集積地の実態を把握し、そこで生き続ける工業の底力を感じることができた。

三日目の集中討議では、参加者に地図を前にして工業集積地、大学（獨協大学）、松原団地、草加宿を結び複合的な地域再生の可能性を議論し

ていただいた。

### ものづくりとまちづくりの再結合

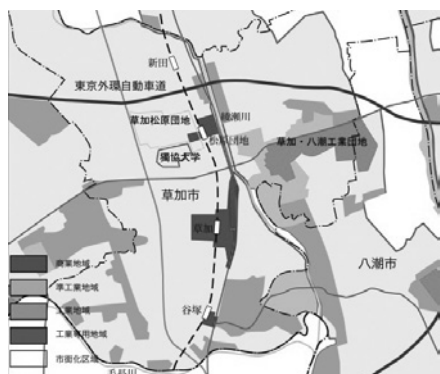
#### 地域密着産業の創出

これからは、スキルや専門的な知識を持つ個人が主役となる時代である。顔が見え、気配を感じられる範囲で、使い手と作り手が一体となつて、地域社会に新たな価値を創造していく。コミュニティ（小地域）に戻つて、ものづくりを再構築していく必要がある。

個々の動きは小さくても重ねることによって、企画力、実行力が高まり、「地域力」が高まる筈で、地域社会の現場から新たな産業としくみを工夫し（医療福祉、子育て、安全、環境、生活文化等）、都市を再構築していく時代を迎えた。

#### 公共空間の埋め込み

#### 草加市の工業集積地



そのまち場のものづくりを復権させるためには、改めて生産空間と居住空間の接点を探り、両者を再結合する第三の空間をまち中に埋め込んでいくことであろう。

- ・公共空間（広場、市民交流施設等）
- ・厚生空間（医療福祉サービス等）
- ・アート空間（知の結節点）
- ・協同セクターの組成

そして、工業を都市の維持装置（ポンプ役）として位置づけ、工業者も参画して、地域再生プログラムを工夫し、地域で具体展開する担い手を新たなセクターとして育てること、地域産業・地域社会の復元が可能になると確信することができた。

- ・町工場の親爺によるまちづくり
- ・若者が集う新産業空間
- ・アーティストからの発信

このような工業地再生を考える機会と場を提供して頂いた草加の事業者、参加者、関係者に感謝したい。

#### 生産空間と居住空間の接点



# 地域資源活用を仲立ちとした都市との交流

## — 小木・深浦集落を起点とした「津々浦々」活性化実験事業報告 —



深浦元気会 会長 ● 菊地繁治



長者ヶ橋から見た深浦集落全景

財団法人地域活性化センターは、「合併市町村住民組織活性化支援事業」として、合併後に主たる事務所が置かれていない旧市町村の地域を活性化することを目的に、住民組織等が自主的・主体的に実施する事業を支援している。今回、平成二十二年度に同事業を活用した、深浦元気会の取り組みを紹介いただいた。

(企画・コンサルタント業務課)

### 地域資源活用策の模索

校、小学校ともに、残念ながら閉校に至っている。

一方、当地は今なお「タライ舟」が現役の漁具として利用されるなど、独自の磯漁の伝統を有している。そこで、その観光面での活用策として、入り江の一角を区切って「釣り堀」とし、釣り大会を催すなどして好評を得ていたが、平成十六年の台

私どもの住む深浦集落は、新潟県

佐渡市の南西部、小木半島の先端近くに位置している。十八世帯、住民五十余名が、日本海に面した谷間にひっそりと佇む静かな地域で半農半漁を営み、豊富にとれるワカメやサザエが特産品として知られている。

気候は、対馬暖流の影響もあって

比較的温暖であり、緑深く変化に富んだ海岸線等、自然環境に恵まれた一角で、まさに「津々浦々」という呼称を彷彿とさせる風土の中にある。しかし、一方では地形が厳しいために、長年にわたり道路の整備が

懸案とされていた。

平成十四年四月、念願の県道佐渡一周線をつなぐ「長者ヶ橋」が、深浦の谷の入口をまたぐように完成し、これを契機として農地の基盤整備が行われ、農業の生産性を高めることによる地域の発展が期待されてきた。

半面、農家の高齢化も進み、若い働き手は、職場を求めて次第に都会へと流出する状況となってきた。

また、農地の基盤整備の完成の一方で、減反政策による生産調整も導入されてきた。

### ■合併市町村住民組織活性化支援事業の概要

#### 【事業概要】

地域自治組織、コミュニティ、NPO、自治会等が自主的・主体的に実施するソフト事業を支援し、合併後に主たる事務所が置かれていない旧市町村の地域を活性化することを目的とする。

#### 【助成対象団体】

平成11年度以降に合併した市町村及び平成23年度に合併予定の市町村

#### 【助成金額・助成率】

助成金額は、200万円が上限（平成22年度までは、300万円が上限）  
助成率は、助成対象経費の100%以内

#### 【交付団体】

平成22年度 35団体  
平成23年度 26団体

#### 【問い合わせ】

企画・コンサルタント業務課  
電話番号 03-5202-6133

風による大しけで海底の様相が変化し、釣り堀を形作っていた網が大きな被害を被ってしまった。自然の脅威に立ち向かうことはできないと判断し、残念ながらこの釣り堀事業は中止せざるを得なくなった。

### 今回事業の経緯

以上のような試行錯誤を背景に、佐渡島内での展開のみならず、地域の自然環境を生かした都会との交流を深め、それにより地域の活性化を進めるべきとの考えに至った。

そこで、地域活性化センターの支援事業を活用することとし、具体的な計画づくりにあたっては、島内のNPO法人「循環の島研究室」の協力を得た。都会との交流といっても、個々人に対する広報宣伝、関係づくりには長い年月を必要とするため、

同NPOを介して島外の二つのNPOと連携関係を築くことで、都市住民との交流の足がかりを得ることにした。

具体的には、平成二十二年十一月、佐渡島の対岸である上越市のNPO法人「かみえちご山里ファン倶楽部」のメンバー六名に四日間、東京都杉並区のNPO法人「樹恩ネットワー

ク」のメンバー五名に五日間にわたり、相次いで当集落に滞在してもらい、集落住民との親睦を深めるとともに、それぞれの手法により地域活動を展開してもらった。

### 事業の内容

本事業の柱となった、島外の都市との交流事業において、まず「かみえちご山里ファン倶楽部」は、いわゆる「地元学」の手法を駆使して集落民の聞き取りや集落内調査を行

集落の家並みや種々の漁具、料理法や加工法など、地元住民が日ごろ当たり前だと思っていたものが、来訪者にとっては、新鮮な価値あるものと映る場合がある。そうしたことが、発表会に出席した集落住民にも理解された。

また「樹恩ネットワーク」メンバーには、当集落裏手の竹林整備作業に汗を流してもらい、さらには竹材を用いて伝統的なサザエ漁具である「サザエヤス」を一緒に作ってもらった。滞在中の十一月十四日には、イベント「磯のサザエ獲り体験」を開催し、サザエヤスはそこで大いに活用された。

当集落の磯場には、岩を穿つて作られた、畳数枚ほどの大きさの四角い生簀が点在する。今日では使われていないこれらの生簀に、あらかじめ捕獲したサザエを放しておき、「磯のサザエ獲り体験」イベント当日は、参加者を磯つたいに生簀まで案内して、手にしたサザエヤスで自ら獲ってもらおうという趣向である。

初めての試みであったが天候にも恵まれ、開始時刻には家族連れをはじめ数十人の方々が順番を心待ちにするほどの盛況となった。ここでも「樹恩ネットワーク」のメンバーには、受付や現地案内などで活躍して

もらった。

### 事業の成果と今後の方向

今回の事業では、イベント開催による集客や当地の産物のPR手法などに新たな一歩を踏み出すことができた。

協力をいただいた上記NPOとの交流はその後も継続し、両団体メンバーの当地への再訪が続いている。両団体のメンバーには、単にお客さんとしてではなく、当集落の抱える課題解決に共に取り組んでもらったため、当事者意識を持つての関わりにつながっており、地元としては実に有難いことである。

また、当初から付き合ひのある島内の「循環の島研究室」には、地元産品の利用法開発（岩海苔あぶり器の導入ほか）をはじめ、アドバイザー役を引き続きお願いしている。

私も深浦元気会では、今年度、タライ舟体験の修学旅行の受け入れを行うなど、引き続き半農半漁の資源を積極的に活用して、地域外との交流を進めていきたいと考えている。そのためにも、当集落に心を寄せてくださる島外や都市在住の、特に若い世代との交流をこれからも大切にしていきたい。



かみえちご山里ファン倶楽部によるワークショップ



生簀でのサザエ獲りイベント

い、「外部者にとつての深浦集落の魅力」を探り出してくれた。最終日には、ワークショップ形式により調査結果の発表を行った。

# 民話が紡ぐ地域の輪

## 角野の民話がつなぐ地域の絆

新居浜市は、四国の瀬戸内海側のほぼ中央に位置する人口約十二万五千人の都市である。新居浜平野の南縁では中央構造線に沿うように千数百メートル級の急峻な四国山地がそびえ、市域の北半分には新居浜平野が広がり市街地が形成されている。元禄四年（一六九一年）の別子銅山開坑によって繁栄し、沿岸地帯は工場群が带状に形成され四国屈指の臨海工業都市となっている。

毎年十月十六・十八日に行われる

市内最大規模の祭事「新居浜太鼓祭り」は、四国三大祭りの一つに数えられる。県内外から多くの観光客が訪れる。今回は、新居浜市角野地区で地域の民話の伝承活動を行っている「民話の里・すみの」を訪ね、直野会長、会員みなさんにお話をうかがった。

### 「民話の里・すみの」結成の背景



四国三大祭り「新居浜太鼓祭り」の様子

平成十五年に「角野の民話・地名掘り起こし実行委員会」が角野地区に昔から伝えられている民話を集めた「角野の民話と伝承」の出版を行った。このことがきっかけとなって、地域の主婦らが中心となり「民話の里・すみの」は結成された。角野地区の民話の読み聞かせを通して、子どもたちがふるさとを愛し、優しさや命の尊さ、豊かな心を育み、読書好きな子供たちが多く育つことを願う活動を行っている。

### 「民話の里・すみの」の活動内容

「民話の里・すみの」では民話の継承活動として、次の活動等を行っている。

(1) 角野小学校での朝の読み聞かせ  
「ふるさとへの愛着と豊かな心を育みたい」と地域の小学校からの要請を受け、一年生から四年生を対象として地域の民話や童話、地元の高

校生が作成した紙芝居等を使い朝の読み聞かせを行っている。単に子供たちに読み聞かせをするだけでなく、子供たちとの会話やふれあいの場を多く持ち、本を読む楽しさと伝える喜びを感じるよう工夫を行うとともに、方言（新居浜弁）での語りを取り入れ、地域住民が日ごろから使っている言葉を通してふるさとに親しみや愛着を持つような工夫も行っている。

### (2) 図書館でのお話会

「民話の里・すみの」では、幼児、園児を対象としたお話会を実施している。読み聞かせの中で遊びも取り入れ、民話劇や絵芝居、エプロンシアター（胸当て式のエプロンを舞台に見立て、ポケットから次々と人形を取り出し、体全体で表情豊かに演じることが出来る人形劇）、ペープサート（人物の絵などを描いた紙に



角野小学校での読み聞かせの様子

### ★ 団体プロフィール ★

設立年＝平成15年7月  
設立・運営主体＝自主的組織  
(コミュニティ組織)  
代表者＝直野 真寿美  
団体の構成＝20名  
〈連絡先〉  
〒792-0834  
愛媛県新居浜市中西町2-6  
電話 (0897) 43-1145



高校生と協働で作成した紙芝居

棒をつけたものを動かして演じる人形劇)などで行うことで幼児、園児たちに昔話を分かりやすくする工夫を行っている。

(3) 高校生への民話の読み聞かせ学習、紙芝居の協働製作

「民話の里・すみの」の会員を講師として愛媛県立新居浜南高等学校において「語り部養成講座」を実施し、異世代交流として保育所へグループによる読み聞かせや高齢者施設において地域に伝わる民話を語るなどの活動を実施している。

#### (4) 絵本の作成

角野地区に伝わる民話や伝説をも



角野の民話と伝説をまとめた絵本

とにした絵本を作成し、小学校や図書館など児童館等読み聞かせに関係する施設に配布を行い、育ちゆく子どもたちへ地域の伝承文化の継承を行っている。

#### 「民話の里・すみの」各種事業の成果

直野会長によると平成二十二年度において、角野小学校での読み聞かせ事業は三十一回実施し、約一万二千九百四十人、図書館でのお話会は十二回実施し、三百二十人の子どもたちに読み聞かせを行った。

子どもたちに本を読み聞かせすることにより、子どもの聞く力、話す力が鍛えられ、子供たちの集中力が高まったとの話であった。

また、これらの活動については公民館、地域住民、高校生と協働で実

施することにより地域コミュニティの推進が図られた。高校生との協働事業においては、高齢者から聞き取った昔話をもとに紙芝居を作成し敬老会や小学校での読み聞かせを行ったりすることで、世代間コミュニケーションを深めながら、地域文化の継承を図られたとのことであった。

これらの活動が認められ、地元ケーブル番組「民話が紡ぐ心の世界」(ふるさとの昔話を会員が語り部になって毎日年間を通じて放送)をはじめ、「民話の里・すみの」の活動は各種マスコミに数多く取り上げられている。年間の参加人数も平成二十二年度は一万六千人を超え、活動の輪は着実に広がりをみせている。

#### 民話がつなぐ地域の輪

「民話の里・すみの」のこれまでの活動は角野地区を中心に行っていたが、今後は地域にこだわらず、その地域にある話、昔の様子などを後世に伝えて行きたいと言うことであった。定期活動だけでなく、出前講座等の不定期活動も年々増え、参



民話の里・すみの  
直野会長(前列右から2人目)と会員のみなさん

加人数は増加しており、地域住民の交流の輪が広がるとともに、異世代の交流など民話を中心とした絆が深まっている。

今回の取材で特に心に残ったのは「子供に喜んでほしい、自分の出来ることは何でもしたい。そういった気持ちになれる民話の里・すみのの活動が自分の生きがい」というある一人の会員の言葉である。今後も地元の伝統・文化を守り、次世代に引き継ぐ「民話の里・すみの」の活動に注目していきたい。

編集委員

● 平野義久

# 地域の「宝」さがして輝く村づくり

## 女性の発想力・行動力で地域を活性化

片品村は、群馬県の東北部に位置し、新潟・福島・栃木の各県に接する山間の村である。高山植物の宝庫として全国に知られる尾瀬や、日本百名山にも数えられる日光白根山、上州武尊山、至仏山などの山岳景観、豊かな自然景観にも恵まれている。

また、首都圏からのアクセスが便利なスキーエリアとしても人気が高く、年間を通じて多くの観光客が訪れている。

今回は、この片品村で地域づくり

活動に取り組んできた「エンジョイネットワーク片品」を訪ね、代表の入澤真理呼氏ほか、メンバーの方々取材した。

### 若い主婦たちが始めた活動

エンジョイネットワーク片品（以下、エンジョイ）が活動を始めた平成五年当時は、オリンピック開催を控えた長野地域の開発が進み、片品村ではスキー客流失の危機感が高まっていた。

その頃、片品村に嫁ぎ、家業と子育て・主婦業の両立に勤しんでいた入澤さんたちは、地域に対する不安や期待を共有していることに気付いた。また、ちょうどその頃、メンバーの子どもが「どうせ俺たちは田舎者だ」と言ったことに、まだ小学生なのに自分たちの住む地域を卑下することにショックを受けたという。

このような中、「愚痴を言っているだけでも変わらない。自分たちでもできることがあるはず。自分たちの住む村を子どもたちが自信や誇りを持ち、楽しく安心して暮らせる魅力的な村にしよう」と、若い主婦たち七人が中心となって、平成五年五月にエンジョイを発足させた。

### 村の宝を再発見するきっかけづくり

①『宝探しin片品ふれあいバザール』の開催

「同じ想いを持つ仲間が集まり、つながる場をつくらう」と始めたのが、今やエンジョイの代名詞ともなっている「宝さがしin片品・ふれあいバザール」だ。住民自身が出店・参加して、たくさんある村の「宝」を再確認することで、地域に対する誇り、村の活力を引き出すきっかけになると考えた。

イベント会場には、片品特産の大白大豆で作った豆腐や手打ち蕎麦、

川魚、手作りパンなど、片品らしい素朴な品物のお店が並ぶ。中にはお年寄りによる藁細工や、子どもたちによる子ども商店街、地元高校生によるクラフト体験等もあり、各自が得意分野で出店し、村の住民であることに自信をもつ機会ともなっている。また、募金で招いた大道芸人や、茶道家・木工・陶芸作家など多彩な分野の人々も参加し、世代や地域、分野を超えた様々な交流が生まれている。

ステージでは子どもたちによる地元の尾瀬太鼓やバンドの生演奏・ダンスなどが行われる。「それまでは人前に出るのが苦手な子が多かったが、バザールを見て尾瀬太鼓を始める子どもが増えている」といい、バザールが自己表現のきっかけとなり、文化の継承にもつながっている。

平成五年に開催した第一回バザールでは、企画から二カ月という短い準備期間での開催にもかかわらず、百人以上の出店協力、千人以上の来場者が集まった。「出る杭は打たれる村社会ではあるが、もともと同じ想いを持った人がたくさんいて、私たちは動き出すきっかけを作っただけ」と入澤さんは語る。

「二十年前の片品村では、一住民の企画したイベントなど前例がな

### ★ 団体プロフィール ★

設立年＝平成5年5月  
設立・運営主体＝自主的組織  
代表者＝入澤 真理呼  
会員数＝コアメンバー11名  
（女性11名）  
リンクメンバー200名以上  
〈事務局連絡先〉  
〒378-0413  
群馬県利根郡片品村越本1246  
TEL 0278-58-2348



ふれあいバザール



子供たちによる尾瀬太鼓の演奏

かった。村人のほとんどが村内の既存の組織・団体に所属する中、多くの方があえて自主的な判断で参加する。個人参加での協力を申し出てくれる。おかげで初回三十万円だったイベントの予算は、現在三万円を切っている。事前会議も一回のみ。一つないのには驚く」

その後、毎年七月上旬に開催を続け、今では約千八百〜二千人が集まる村恒例の行事に成長している。また、エンジョイではバザールに出店した人をリンクメンバーとして認定しているが、このリンクメンバーの

輪は現在二百人以上に広がり、この中から実際に起業につながった例も出てきている。

②村消費生活展への参加

片品の豊かな自然環境を守り継いでいくためにできる身近なこととして、環境に負荷をかけない生活の工夫を紹介したいと考え、毎年十一月に開催される「村消費生活展」において、環境に優しい商品や取り組みを紹介している。これまでに環境に優しい洗剤・和布の紹介や資源の分別・リサイクル、廃油回収の提唱等を行ってきた。

③身近な問題に関する勉強会の開催

村民が関心のある問題をわかりやすく学べる勉強会も不定期に開催している。最近では、震災後に南相馬市から避難された方々を村で受け入れたことを機に関心が高まっていた「放射能・放射線」についての勉強会を開催した。その他、村内民芸館駐草場の花壇づくりや、民芸の伝承、摘み草クッキング、健康づくり体操など、個々のメンバーがそれぞれの関心のある分野で中心となって活動している。

### 次世代へつなげる想い

エンジョイの活動に影響を受けた若者たちの中には、新たな活動の芽も生まれている。

例えば、若者が中心に始めた「片品トマト祭り」や村の豆腐屋さんが始めた「片品大自祭」など。「片品大自祭」は十回目を迎えた今年度から、若者たちに引き継がれ、村全体のイベントとして開催している。この豆腐屋さん自身もバザールでの出店を機に起業に自信を持ち、今やこの豆腐は村の特産品となっている。

メンバーたちは「二十年前から村の応援団を自負し

てきた。村を担っていく若者たちをこれからもサポートしていきたい」と語る。また、「人間社会の縦割り・三角ピラミッド組織の盲点や弊害を、女性のたやかな視点と行動で補って、バランスの良い生活環境の構築に寄与したい」と、地域内にとどまらない視野で語る入澤さん。

### 「人」が一番の宝物

エンジョイのモットーは「やりた人がやりたいときに楽しんでやること」。そして「リンクメンバー達も含めて互いが有形無形に応援し合っている」ことで、二十年近く活動を継続できたという。このように「村の宝」がつながるきっかけをつくってきた彼女たちの活動は、「誰でもできることから一歩ずつ始めること、そして続けること」の大切さを改めて教えてくれる。

メンバーのみなさんは「片品にはたくさんさんの宝があるが、村の人たちが一番の宝」と語る。つねに前向きに活動が続けてきたこの女性たちも片品村の「宝」だと感じた。今後、彼女たちが楽しんでつないできたネットワークが村を輝かせていくことだろう。

## スポーツ拠点づくり推進事業

(京都府宇治市)

# 地域の活力を生かした大会づくり

―「全日本中学ボウリング選手権大会」を開催―

宇治市教育委員会生涯学習課 主任

● 小松洋二

地域活性化センターでは、スポーツ拠点づくり推進事業として、市区町村とスポーツ団体が連携・協力して全国各地に青少年があこがれ、目標とするスポーツごとの拠点をすることでスポーツの振興と地域の再生を推進する取り組みを支援している。

今回は、京都府宇治市の取り組みを紹介いただく。(地域支援課)

## だれでも楽しめる生涯スポーツ

宇治市は、京都府南部に位置し、京都市や大津市に隣接する位置にあり、全国的に有名なお茶どころで、平等院や宇治上神社などの世界遺産、『源氏物語』宇治十帖の舞台として知られている。また、スポーツも盛んであり、マラソンの千葉真子さんをはじめ優秀なスポーツ選手を多数輩出している。

「全日本中学ボウリング選手権大会」は、平成十八年度に財団法人宇治市体育協会、財団法人全日本ボウ

リング協会、社団法人京都府ボウリング連盟、宇治市ボウリング協会、そして宇治市教育委員会の五団体が「全日本中学ボウリング選手権大会実行委員会」を組織し、同年度に地域活性化センターより「スポーツ拠点づくり推進事業」として承認を受け、平成十九年度から本市小倉町の「キョーイチボウル宇治」を会場に実施している。

ボウリングは子どもから高齢者の方まで、だれもが楽しむことのできる生涯スポーツであり、レジャー性も高く、ほとんどの方がおそらく一

生に一度は楽しむスポーツである。そのボウリングの全国大会が本市で開催されることは、市の生涯スポーツ推進に大きな効果をもたらすものとの考えから、本市での大会実施が実現した。

今年七月二十一日(木)～二十三日(土)までの三日間実施し、四十都道府県から男子百十三名、女子七十四名の計百八十七名の選手が参加した。

会場には選手の保護

者をはじめ多くの観戦者が訪れ、賑わいを見せた。大会ではプロ選手でもなかなか出ることが出来ないパーフェクトゲームが出るなど、中学生とは思えないようなハイレベルな戦いが繰り広げられた。特に決勝戦では白熱した展開となり、多くの方が会場の緊迫した空気に固唾を飲みながら、観戦を楽しまれた。

## 全国から集う中学生ボウラーが集団生活

本大会では、周りを雄大な自然環境で取り囲む「アクトパル宇治」を選手・監督の宿泊地とし、集団生活

を体験してもらう場としている。全国から集う中学生ボウラーが五人から八人の相部屋で三日間を過ごし、期間中に大いに交流を図っていたことは、選手たちにとって大切な経験となる。

一日目にはこの「アクトパル宇治」にて交流会を開催し、その中で行われる、市内の子どもたちからの宇治茶(抹茶)のお点前や地域の方々とのモチつきを通して選手間のみでなく地域住民との交流も大いに深めている。



ジュニアボウリングスクールの様子



交流会での宇治茶（抹茶）のお手前の様子



大会決勝戦の様子

大会のポスター、パンフレット、参加賞の団扇については地元京都芸術高等学校の協力によるデザイン画を提供していただいております、写真では表せない迫力のあるイラストが多く、市民の目を引き、大会の周知に大いに貢献している。

このように、本大会は実行委員会の力のみに頼るのではなく、地域にある、あらゆる活力を生かし、より一層大会を盛り上げていくことを念頭に置いてこれまで実施してきた。このような大規模な大会で地域の活力を生かすことにより、市の活性化・

地域の団結につなげていこうと考えている。

本大会が行われることは、宇治市の観光面を大きくアピールする場にもなっている。今年から大会の決勝戦についてはBS日テレにてテレビ放送され、冒頭部分に市の観光名所の紹介もされており、大会の認知及び観光のPRにも大きな効果がもたらされている。

さらに、前述のとおり交流会において行われている宇治茶（抹茶）のお点前は、選手・監督から高い評価をいただいております、改めて「お茶の町・

宇治市」としての認知度を高めることに、大きな役割を果たしている。その他、大会に先立ち選手の保護者の方を対象に宿泊施設の斡旋を行い、大会期間中には会場内に宇治市観光協会の協力のもと、地元の物産の販売、観光個所を記した地図を配布するなどして、地域経済の活性化も大いに図られている。

## ◇ ボウリングを市民に普及する場に ◇

また、本市ではボウリングを市民に普及する場として大会初日の午前中に「ふれあいボウリング」を、大会終了後に「ジュニアボウリングスクール」を実施している。「ふれあいボウリング」は地域のボウリングチームの協力のもと、市内の小学四年生から六年生を対象に参加者を募り、ボウリングの基礎的な知識を身につけてもらうとともに、とにかくボウリ

ングを楽しんでもらうことを目的に実施している。夏休み期間中ということもあり、今年は六十五名の小学生が参加し、大会を大いに盛り上げ、さらに大会の宣伝にも一役買っている。

「ジュニアボウリングスクール」は「全国大会が宇治市で行われているのであれば宇治市から優秀な選手を育てよう」という思いのもと、大会終了後の四日間にわたり、本格的なスポーツボウリングの技術指導を行っている。

今年は十名の小学生が参加し、市のボウリング協会の協力のもと、参加した選手は大いに技術のレベルアップが図られ、今後の大会においてその実力が発揮されることを期待するばかりである。

本大会は本市の活性化に大いなる効果をもたらしている。今後はこれまで以上に地域の様々な活力を生かし、市全体で取り組む事業としての認識を深め、さらなる地域発展、生涯スポーツの推進につなげていかなければならない。

また、その中で本市の出場選手の飛躍的なレベルアップを図り、本大会から、将来日本・世界の檯舞台で活躍する選手が誕生することを期待したい。



岐阜市長 ● 細江 茂光

## 平成24年度は「原点回帰」

早いもので今年も残り僅かとなり、この一年を振り返る時期を迎えております。千年に一度とも言われる三月十一日の東日本大震災から、九カ月が過ぎようとしておりますが、被災地の傷跡は未だに色濃く残っており、日本を揺るがす未曾有の大惨事であります。お亡くなりになられた方々に哀悼の意を表しますとともに、被災された方々にお見舞い申し上げます。

岐阜市は、震災発生日から被災地へ消防職員や上下水道事業部の職員、保健師や医師などを派遣し懸命の支援を続けてきております。また、岐阜市や岐阜県内に避難された被災者の方々を元気づけたいと考え、千三百年の歴史がある「ぎふ長良川鵜飼」の鵜飼観覧船にご招待し、岐阜城を頂く緑豊かな金華山を背景に、鵜匠が巧みに鵜を操る伝統漁法を楽しんでいただきました。岐阜市の温かいもてなしに、心打たれたとの言葉をいただき、本当に良かったと嬉しく思ったところです。

今回の震災においては、人と人のつながりの大切さ、絆の大切を誰もが実感した所ですが、一方では、大津波の前に崩れさる防波堤や、原子力発電所の事故など、積み上げてきた人間の叡智が自然の猛威に及ばないことを思い知らされ、これまで利便性や効率性を追求してきた文明社会や自然と人間との関係やあり方を、原点から見つめ直す必要があると感じました。

かつて、天動説から地動説へ、世の中の概念が変わった時期があったように、今回の災害は、現代社会に大きな衝撃を与えたと考えております。

十二月は振り返りの時期であるとともに、新たに迎える年が市民にとってよりよい年となるよう、行政の長として様々な思いを巡らす時期でもあります。岐阜市では、平成二十四年度の予算編成にあたり、その方針を示す、「岐阜市重点政策の基本方針」を策定しました。

震災を踏まえて、今一度、行政経営の原点に立ち返り、人の叡智や絆が生み出す人間の力に回帰して、新たな未

来を切り拓く年にしようということで、「原点回帰」を新年度の基本的な考え方としました。

岐阜市は、平成十八年に「知識社会への転換」を基本方針として、教育を最重要政策に位置づけ、教育によってまちを活性化させる、若い世代に選ばれるまちづくりを進めておりますが、新年度も人々の能力を発掘し、磨き高める、「教育」に重点を置いた施策を展開したいと考えております。加えて「健康」「文化芸術」「防災」「環境（エネルギー）」を重要政策の柱とし、人と人との絆を深める施策や市民と行政との協働事業にも力を注ぎ、未来に明るい希望を抱いて、この地に生まれて良かったと実感できる岐阜市を目指す思いです。

岐阜市は、戦国時代で最も人気のある、織田信長公が十年間もの間、岐阜城に居を構えて天下統一の足がかりとした土地であり、金華山の麓には織田信長公の居館の跡もあります。今年の二月には、岐阜城跡と金華山一帯が、高い歴史的価値を認められ、国の史跡に指定されるなど、自然や歴史、文化に恵まれたまちでもあります。

一方で、JR岐阜駅周辺の再開発事業として、高さ百六十三メートルのシティタワー43に続き、スカイウイング37が来年度に完成予定となるなど、市街地再開発事業も順調に進み、都市の成長力を着実に蓄えており、これらの、歴史資産や社会基盤を生かしたまちづくりにも積極果敢に取り組んでいきます。

今、日本は、リーマンショックに続き、三・一一ショックと、わずかな期間に厳しい危機を二度も経験し、さらに世界に例のない高齢社会が本格化するなど、地方自治体を取り巻く環境は、厳しさの度を増すばかりです。

しかし、増加する行政需要に対応し、しっかりと住民サービスを維持向上させるためにも、これまで以上に行政改革を徹底し、財政規律を維持しながら、世界の中でキラリと輝く、日本一元気な県都岐阜市の実現を目指していきます。

# 「歴史と海峡のまち」の もう一つの魅力♪



■ 関門海峡と関門橋（手前が下関市、対岸は北九州市）

**下**関市は、本州の最西端に位置し、朝鮮半島や中国に近いことから、海上・陸上交通の要衝としてアジアへの玄関口として栄え、現在も、下関港から複数の国際定期フェリー航路で韓国、中国の各都市と結ばれるなど、大陸との窓口として大きな役割を担っている。

韓国・釜山広域市と姉妹都市でもある下関には、リトル韓国ならぬ「リトル釜山」タウンがある。それはJR下関駅前にある「グリーンモール商店街」だ。ここには、焼肉店を始め韓国食材の揃った食料品店や雑貨店など、ハングル表記の看板や商品が道路の両側に並んでいる。

また、毎年11月23日（いいプサンの日と語呂合わせています）には、「リトル釜山フェスタ」が開催され、コリアンフードの出店や伝統舞踊などのイベントで、通り一帯が韓国色一色になる。

下関といえば「ふぐ」が有名だが、新しい味力（みりょく）のコリアンフード、手前みそではなく手前コチュジャンということで、ぜひ一度ご賞味あれ！



■ グリーンモール商店街入り口にそびえる釜山門



■ 商店街のあちこちに韓国カラーの看板が観光客を出迎える



■ 韓国直送の商品が並ぶ食品店。韓国料理の食材はここで揃う



■ 邦楽座別館の店内には韓流スターグッズや、韓国コスメが並ぶ。トッポギ、韓茶なども飲食できる



■ 平成23年に、グリーンモール商店街に韓国グッズを販売する「邦楽座別館」がオープン



■ グリーンモール商店街では、商品のディスプレイもアジア風。釜山の市場と見まがう風景



■ リトル釜山フェスタのステージでは、伝統音楽・舞踊、テコンド模範演舞などが披露される



■ リトル釜山フェスタの目玉は、韓国料理の出店。チヂミやトッポギなど本場の味が楽しめる



■ リトル釜山フェスタで韓国民族衣装「チマチョゴリ」の試着。カメラに向かって「はい、キムチ」



## 平成24年度全国地域リーダー養成塾 塾生の募集!

全国地域リーダー養成塾は、様々な分野で既存の枠にとらわれない斬新かつ大胆な発想のできる地域のリーダーの養成を目的とした、体系的かつ効果的なカリキュラムによる研修です。

平成元年度から開講し、22年度までに734名の感性豊かな実行力のある地域のリーダーを養成してきました。現在、第23年度の塾生が研修を行っています。

熱意ある皆さんの積極的な参加をお待ちしています。

- 研修期間 平成24年5月から平成25年2月初旬
- 募集人数 40名程度
- 応募資格 地方公共団体等の職員、地域づくり団体等のメンバー（募集案内参照）
- 研修内容 地域づくりの専門家・実践家等による講義のほか、ファシリテーション研修、プレゼンテーション研修などのグループ演習を取り入れ、実践を重視した研修を行います。  
また、主任講師による少人数のゼミナール形式の講座を開講し、塾生各自が地域のテーマを見つけ、調査・研究に取り組み、成果を修了レポートにまとめます。きめ細かい指導により、「自ら考える力」を養います。
- 申し込み 募集案内及び参加申込書は、センターのホームページ（「地域づくり百科」<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp>）からダウンロードできます。
- 応募方法 平成24年1月20日（金）までに、各市区町村担当課へ応募書類を提出してください。
- 問い合わせ先 研修交流課  
（電話）03-5202-6135



通信  
センター

### 「地域づくり」12月号別冊 『地域づくり団体活動事例集～地域づくり新段階～』発行!

全国各地の地域づくり団体は「新しい公共」の担い手としての役割がますます重要となっており、現在、多くの地域づくり団体は、少子高齢化や地域経済の停滞など様々な困難を克服しながら、地域課題の解決に向けて活動に取り組まれています。

そこで、当センターでは、地域づくり団体の参考に資することを目的として『地域づくり団体活動事例集～地域づくり新段階～』を発行しました。

本書は、自主的・主体的な地域づくりのための活動を行う、全国4,200の地域づくり団体が参加する「地域づくり団体全国協議会」が毎年、ネットワークの充実を図るとともに、地域住民の主体的な地域づくり活動の更なる活性化を推進することを目的として行う「地域づくり団体全国研修交流会」を参考に企画しました。

「基調論文」を地域づくり団体全国協議会会長の岡崎昌之法政大学教授に、「トピック記事」を第26回～第29回の地域づくり団体全国研修交流会の各実行委員長に、それぞれ執筆いただきました。さらに「活動紹介」として、地域の課題解決に向けて、地域資源を活かしながら知恵と工夫により、様々な取り組みを行っている8団体の活動を紹介します。ぜひご活用ください。

- お問い合わせ先 企画部研修交流課  
TEL：03-5202-6135



### 『総務大臣表彰』等受賞団体の動画公開

「地域づくり総務大臣表彰」や「過疎地域自立活性化優良事例総務大臣表彰」、「ふるさとイベント大賞」を受賞した地域の活性化に励む優れた取組を10分ほどの動画にまとめ、様々な活動のヒントになるようにインターネット上で公開しています。

今年度から、You Tube（動画共有サイト）でも視聴できるようになりました。

TVドラマや映画のモデルになった「高校生レストラン」や「書道パフォーマンス甲子園」など公開開始!

#### ◆今年度公開予定の動画

- 平成22年度 地域づくり総務大臣表彰 41団体
- 平成22年度 過疎地域自立活性化優良事例総務大臣表彰 4団体
- 第15回 ふるさとイベント大賞 8団体

#### ◆視聴方法

- 地域活性化センターHPトップ ⇒ 『地域づくりTV』（左側のバナー）
- 『地域づくり総務大臣表彰団体』や『地域づくりTV』で検索!

【問い合わせ先】地域支援課 TEL（直通）：03-5202-6137



## ★日本橋プラザビルイベントスペース

12月

- 12月7日(水)～9日(金)  
おいらせ町(青森県)  
『青森おいらせ・ブランド 新青森開業・新特  
産品フェア』

1月

- 1月11日(水)～13日(金)  
秋田県雄勝地域振興局(秋田県)  
『こまちの郷観光物産展』
- 1月26日(木)～27日(金)  
中山町(山形県)  
『新鮮なかやま市』



(写真)

- 1 10月6日～7日田辺市観光物産展【世界遺産 熊野古道と紀州の食 物産展】(田辺市)
- 2 10月12日～14日津市・四日市市 観光と物産フェア(津市・四日市市)
- 3 10月20日～21日五泉ファッションフェアin東京(五泉市)
- 4 10月27日～28日ガンパロウ茨城!ガンパロウ日立!震災復興日立フェア(日立市)

### 【編集後記】

▼休日のオフタイムに、喫茶店で友人と歓談したり気ままに読書したりするのは、至福の時刻かもしれません。こうした喫茶店「カフェ」とは少し趣きの違う、地域住民の「たまり場」「交流拠点」となっているのがコミュニティカフェ。今月号はその活動に注目し、特集しました。

▼全国のコミュニティカフェのネットワークづくりに取り組む公益社団法人長寿社会文化協会(WAC)によると、その数は現在、推計三万件超に上るそうです。高齢者福祉や子育て支援、まちづくり、環境や農業、国際交流など、それぞれ狙いを定めたコミュニティカフェが運営されています。掲載事例はほんの一部ですが、様々な人たちの心温まる触れあいや助け合いが日常茶飯に行われていて、触発されます。

▼なぜ近年、コミュニティカフェが増えているのか。名和田彦・法政大学教授は、その背景を「自治体がこれまで整備してきた市民活動支援拠点Ⅱ集合施設では満たされないニーズがあるため」と分析。誰もがふらっと寄り居心地よく過ごせる空間が求められているからだと言及しています。まさに、市民活動として新しい「公共の場」を再建する試みでしょうか。

▼はや師走。「今年の十大ニュースは？」の声も聞かれます。日本を変えた東日本大震災は、世界全体でも上位となるでしょう。被災地での復旧復興作業はなお続いています。来年も地域の元氣につながる情報をお届けします。(原田)

### 【1月号予告】

特集Ⅱ「パワースポットを活かしたまちづくり(仮)」

【別冊】地域活性化事例集

「シティプロモーションによる地域の活性化」

### 地域づくり12月号

2011年12月1日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本／株式会社丸井工文社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えます。地域づくり情報課(03-5202-6138)まで、ご連絡下さい。

宝くじは、  
地方自治体の公共事業等に  
幅広く使われています。

NEW!

ワクワク、  
続々。



宝くじの収益金は、  
病院や検診車、図書館や動物園、  
災害に強い街づくり、  
緑あふれる公園、美術館など、  
皆様の暮らしに役立てられています。